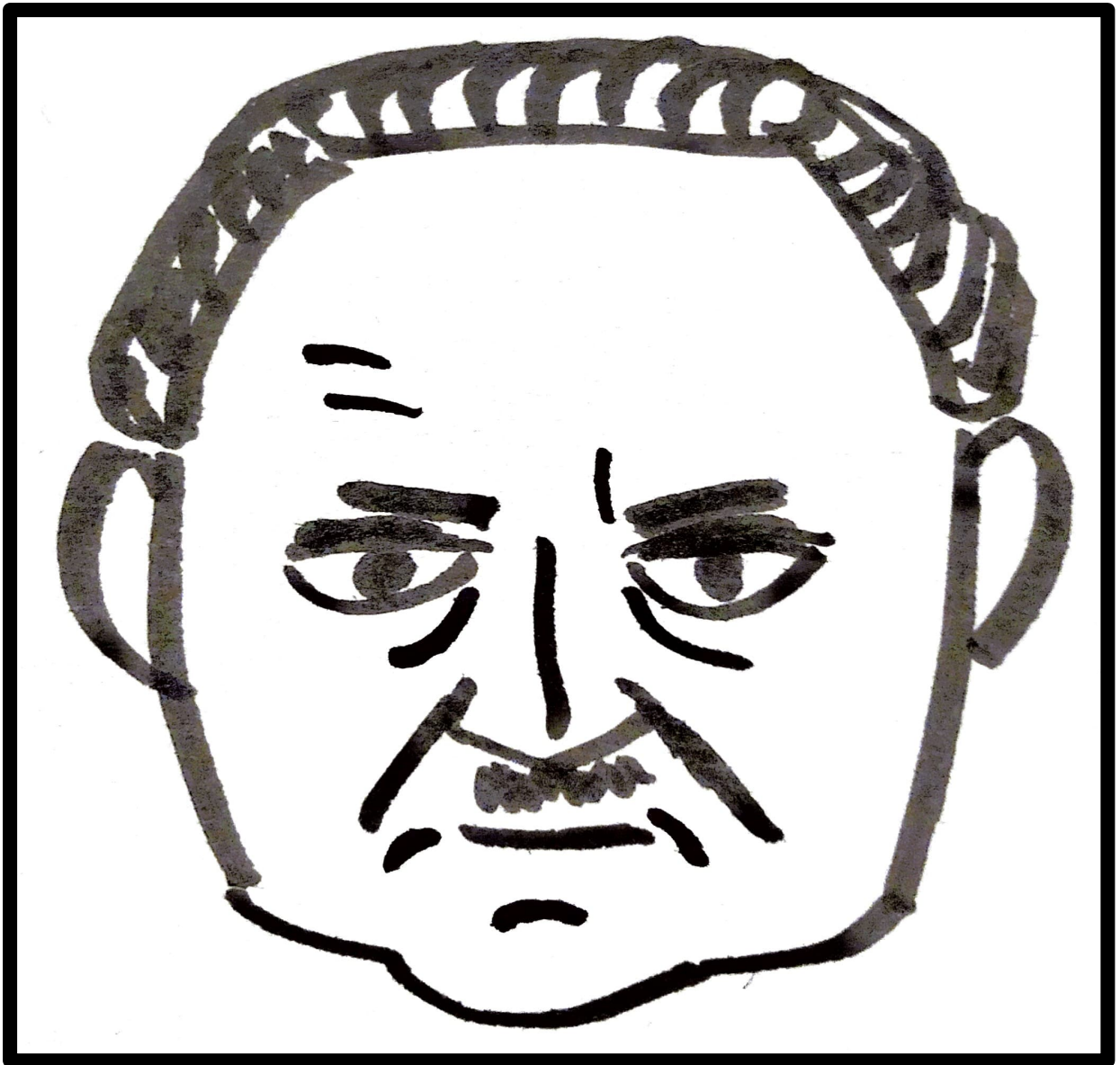


2020

みらいつくり哲学学校



偶数回

『存在と時間』を読む

2021.3.9発行

目次（偶数回）※奇数回は別紙

第2回	イントロダクション	…	p. 2
第4回	序論	…	p. 4
第6回	第1部 「時間性をめがける現存在の学的解釈と、存在への問いの超越論的地平としての時間の究明」	…	p. 8
第8回	第1部第1篇第3章「世界の世界性」	…	p. 14
第10回	第1篇第4章「共存在および自己存在としての世界内存在 『世人』」	…	p. 18
第12回	第1篇第5章「内存在そのもの」前半	…	p. 22
第14回	第1篇第5章「内存在そのもの」後半	…	p. 29
第16回	第1篇第6章「気遣い」前半	…	p. 34
第18回	第1篇第6章「気遣い」後半	…	p. 37
第20回	第2篇第1章「死」前半	…	p. 42
第22回	第2篇第1章「死」後半	…	p. 45
第24回	第2篇第2章「証しと決意性」前半	…	p. 50
第26回	第2篇第2章「証しと決意性」後半	…	p. 53
第28回	第2篇第3章「気遣いの存在論的な意味としての時間性」	…	p. 57
第30回	第2篇第4章「時間性と日常性」（前半）	…	p. 61
第32回	第2篇第4章「時間性と日常性」（後半）	…	p. 68
第34回	第2篇第5章「時間性と歴史性」	…	p. 75
第36回	第2篇第6章「時間性と、通俗的な時間概念の根源としての時間内 部性」	…	p. 82

第2回 イン트로ダクション

本日2020年5月19日（火） 10:30～12:00で、第2回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。今回も、全国から10名の参加がありました。

偶数回では、マルティン・ハイデガーの『存在と時間』を課題図書として扱います。奇数回の『生きる場からの哲学入門』と違い、ゴリゴリ（笑）の哲学書なので、誰も参加してくれないんじゃないかな・・・とと思っていましたが、「まさに読みたいと思っていた本だった」「ずっと読みたいと思っていたが取り組めずにいた」という方がけっこういらっしゃいました。

今回は、イントロダクションということで、『存在と時間』という本の説明や、今後の進め方について話し合いました。

『存在と時間』は、ドイツの哲学者マルティン・ハイデガーの主著です。

本来であれば二部構成だったはずのようですが、教授に就任するためという必要性によって、未完の状態で1927年に公刊されます。

ちなみに、ハイデガーの当初の構想はこんな感じ（中公クラシックス版、第8節より）

第1部 時間性をめがける現存在の学的解釈と、存在への問いの超越論的地平としての時間の究明

第1篇 現存在の予備的な基礎的分析

第2篇 現存在と時間性

第3篇 時間と存在

第2部 存在時性の問題性を手引きとする存在論の歴史の現象学的破壊の要綱

第1篇 存在時性の問題性の前段階としての、カントの図式論と時間論

第2篇 デカルトの「我思考ス、我存在ス」の存在論的基礎と、「思考スルモノ」の問題性のうちへの中世存在論の引き受け

第3篇 古代存在論の現象的土台と限界との判別基準としての、時間に関するアリストテレスの論述

この時点で、????????って感じですよ（笑）

上記の構想のうち、第1部第2篇までしか書かれていない状態で公刊されたのです。

にも関わらず、『存在と時間』は世界的にもすごい影響を及ぼし、ハイデガーは一気に「世界の大哲学者」の一人になります。

ハイデガーはその後、第二次世界大戦中にナチスと関わり、戦後は一時期教授としての権利を剥奪されたりするなど、なかなか大変な時期を過ごします。

ただ、ハイデガーによる「存在への思索」は生涯やむことはありませんでした。

今回の対話は、「なぜ哲学学校に参加したか」というメンバーの一人の問いかけから始まりました。

他の人と意見を交わすのが好きだから、研究を行っている過程で最終的には哲学にいくしかないと思ったから、最近会社を退職して昔挑戦したけど挫折した本をたくさん発見してまた挑戦したいと思ったから、数年前に家族を亡くして「生きる」ことについて考えるようになり哲学がヒントになるかもしれないと思ったから、もともと「方法としての哲学」が好きだったから、「教える人—教えられる人という二元論」を乗り越えるために存在論を学ぶ必要があると思ったから、などなど、皆さん様々な理由で参加してくださいました。

その後、話は「ハイデガーと中世存在論／キリスト教との関係」へ。参加者にクリスチャンが多かったこともあり、そういう質問が出ました。これについては、本来は第2部第2篇で取り扱われる構想でしたが、結局ハイデガーは『存在と時間』を完成させることを断念します。

ただ、未刊部の第1部第3篇と第2部については、既刊部が公刊された1927年にハイデガーが行った講義で、その構想について話されています。この講義の内容は、『現象学の根本問題』としてまとめられ、日本語訳も出ています。この本を翻訳した著明なハイデガー哲学者である木田元さんは、岩波現代文庫で「ハイデガー『存在と時間』の構築」という本を出されており、未刊部分を含めた『存在と時間』をハイデガーに代わって再構成するという試みをしています。こちらはそれほど厚く無い本なので、ご関心のある人は読んでみてください。

第4回 序論

2020年6月2日（火） 10:30～12:00で、第4回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

前はイントロダクションで、今回から本編に入りました。

といっても今回の箇所は「序論」。ハイデガーの壮大な構想である2部構成に入る前の前段です。

…だけど、実はこの構想は第1部の途中までしか実現しませんでした。

ただこの「序論」の後半では、未刊となった部分についての構想も述べられています。

序論は「存在の意味への問いの開陳」として2章構成となっています。

第1章は「存在問題の必然性、構造、および優位」。

なぜハイデガーが「存在の問い」をたてるのかということについて述べられています。

哲学の二大領域と言われているのが「存在論」と「認識論」。

「存在論」は、ソクラテス以前の古代ギリシア時代から近代に至るまで、繰り返し哲学されてきた領域です。

にもかかわらず、ハイデガーは「存在問題は今日では忘却されてしまっている」と言います。

その意味は、「わかっているつもりで語られているが、『存在の問い』についての答えは得られていないし、実は問いのたて方からして間違っているのだ」ということです。

私たちは、つねに何らかの「存在了解内容のうちで動いている」とハイデガーは言います。

つまり、「存在」というものについて何らかの形で「了解」しているということです。

ですが、ハイデガーは「存在」というものの意味を捉える「地平」をすら捉えることができていないのだということです。

ハイデガーによれば、「目の前にある」ということは「事実存在」（「実在」と呼んだりしますね）であって、本当の「存在」の意味とは違うのだと言うのです。ハイデガーの結論を先取りして言うと、「存在」というものの意味を捉える「地平」は、「時間」であると言います。本当の「存在」の意味は、「目の前にある」とかいう空間的なことではなく、「時間」という地平で捉える必要がある、と言うのです。

ハイデガーは、「存在するもの」すべてを指して「存在者」と言います。「者」と言っても人間だけに限らず、机や自然などの「物」も含まれます。

ハイデガーは「存在の問い」にアプローチする上で、この「存在者」の中から「ひとつの際立った存在者」を取り上げます。それが「現存在」です。この「現存在」というのは、ハイデガーによる「人間という存在者」の表現です。

「なんで普通に人間って呼ばないんだ」、当然の疑問ですよ。

ハイデガーが言う「現存在」は、「目の前にいる」つまり「事実存在する」人間のことで無いです。

「人間」という「場」における「存在」の「現われ」という感じで「現存在」という用語を使います。

またハイデガーは、「現存在」がそれ自身に対して何らかの態度をとることを「実存」と呼びます。

ハイデガーは「存在の問い」、つまり全ての「存在者」の「存在」の意味を問うアプローチとして、この「現存在」の「実存」というものを分析すると宣言します。

そして、全ての存在者の「存在」の意味を問うことを「基礎的存在論」と呼び、際立った存在者として現存在というものを取り上げるアプローチを「現存在の実存論的分析論」と呼びます。

結局ハイデガーは、『存在と時間』においては後者の「現存在の実存論的分析論」しか取り上げることができず、そもそもの目的であった「基礎的存在論」についてはその後彼の一生をかけて思索していくことになるのです。

っていうかその前に、「現存在の実存」にアプローチする上での「地平」となる「時間」についてすら、十分に分析できないまま終わってしまうんです。本来は、第1部の第3篇「時間と存在」においてそれが分析されるはずだったのですが、これも未刊に終わっています。

第2章は「存在問題を仕上げる時の二重の課題 根本的探究の方法とその構図」。

まず最初に、現存在の実存にどのようにアプローチするのかという事が述べられます。

ハイデガーが面白いのは、「実存」には「本来的」なものと「非本来的」なものがあるというのですが、「非本来的」なものからアプローチしていくんですね。

「非本来的な実存」を「差しあたってたいてい存在している状態」とか「平均的日常性」と呼びます。

つまり、「人間って、普段はこんな感じにいるよね？」という状態からアプローチするということです。

ハイデガーによると、時間も「本来的な時間」と「非本来的な時間」があると言います。

「非本来的な時間」とは、私たちが普通に考える「過去－現在－未来」という流れにあるものですが、ハイデガーはこれを「通俗的な時間概念」と呼びます。つまり、「みんなが普通はそうだと思っている時間の考え方」だということです。

ハイデガーは、「現存在の存在はおのれの意味を時間性において見いだす」と言います。

ここでいう「時間性」は「通俗的な時間概念」によるものではなく、「本来的な時間」であり、ハイデガーはそれを「存在時性（テンポラリテート）」と呼ぶのです。

またハイデガーは、現存在には「歴史性」というものもあると言います。

このように、本来「存在」というものを考えるときには、「存在時性」や「歴史性」をとともなう「現存在」について考えなければいけないのですが、これまでの哲学における存在論ではそれをしてこなかったと言うのです。

ハイデガーは自らに「存在の歴史の破壊という課題」（第2章第6節のタイトル）を課します。

哲学の二大領域のひとつである「存在論」のこれまでの歴史を「破壊」しなければならないと言うのです。

ハイデガーが想定した「誤った存在論をつくってきた相手」は、アリストテレス、中世の神学者（トマス・アクィナスなど）、デカルト、カントと言った、誰でもその名前を聞いたことのある「大哲学者」たちでした。

残念ながらその戦いも、『存在と時間』においてはなされないままに終わります。

ちなみにこの戦いの一部は、『存在と時間』発刊の翌年に行われた講義『現象学の根本問題』として読むことができます。もっともこれはあくまで「講義録」という形であって、『存在と時間』のように体系的になされたものではありません。

後半の対話では、ハイデガーが考え出したこの「現存在」という概念について議論がなされました。

現存在＝人間ではないのか？

人間の中でも現存在ではない存在者はいるのか？

現存在は、「類」なのか、「種」なのか、それとも個人なのか？

動物は現存在とは言えないのか？

重症心身障害者も現存在なのか？

哲学学校のメンバーとして参加している障害当事者の一人は、自分の「存在の意味」というものについて最も考えたのは、「死」というものを意識した時だったと言います。

「10歩で死に至るとして、9歩までいってしまうと『自分の存在の意味』について考えている暇など無くなる。

逆に、1歩とか2歩とか、つまり『死』のことなど全然意識しない時には『自分の存在の意味』についてなど考えない。

9歩のところから、6,7,8歩くらいまで戻った時にもっとも『自分の存在の意味』を考えられるように思う」

と発言してくれました。

実際ハイデガーも、「実存」についての「全体性」を考えるときに、「死」というものを考える必要があると言います。

第1部 第2篇「現存在と時間性」において、第1章で「現存在の可能的な全体存在と、死へとかかわる存在」というテーマを掲げ、「死」の問題について分析しています。

ハイデガーが、「死」について考察した哲学者として一番にあげられる所以がここにあります。

ちなみに、私が高校生の時に「人生で初めて読んだ哲学書」としてこの『存在と時間』を手にとったのも、「死」についての記述があったからでした。もっとも、当時は書いてある内容が1ミリも理解できませんでしたが…。

『存在と時間』のように難解な哲学書も、多様性のある人たちと議論しながら一緒に読むと「もしかしたらこの本、面白いのか？」と（1ミリくらい）思えたりします。

また、対話の中で参加者が発した言葉が、大哲学者が考えたのと同じ内容だったりして、驚くこともあります。

第6回 第1部 「時間性をめがける現存在の学的解釈と、存在への問いの超越論的地平としての時間の究明」

2020年6月16日（火） 10:30～12:00で、第6回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回からいよいよ本編である第1部に入りました。

第1部のタイトルは「時間性をめがける現存在の学的解釈と、存在への問いの超越論的地平としての時間の究明」です。

ハイデガーがこの『存在と時間』で探求しようとしている「存在一般の問い」について、まずは「現存在」（ハイデガーの言うところの「人間」）からアプローチしようというもの。第1部の答えを先取りすると、「現存在」というものは「時間性」をめがけるということで、その「時間性」こそが「存在一般の問い」を探究していく「超越論的地平」となるということです（「超越論的」というのは哲学でよく出てくる用語ですが、「それ以上遡ることができない」という意味です）。その上で第2部では、その「時間性」をもとにして、「存在一般の問い」に関してそれまでの哲学を「破壊する」ということが構想されていました。ですが、第2部は未刊に終わっています。

第1部は本来、第1篇から第3篇までであったのですが、第2篇までしか書かれていません。

第3篇が「時間と存在」というタイトルで、前述した第1部の結論について詳しく論じるはずだったのですが、それも未刊に終わりました。

第1篇のタイトルは「現存在の予備的な基礎的分析」となっています。

第2篇のタイトルが「現存在と時間性」なので、第1部のテーマである「時間性」に関する議論の土台として、「現存在（つまり人間）」について、予備的かつ基礎的な分析をしよう、というのが第1篇のテーマになります。

第1篇は全部で6章の構成になっていますが、今回扱ったのは第1章と第2章。

第1章のタイトルは「現存在の予備的分析の課題の開陳」。

第1篇で行う分析における課題をまずは提示しますよ、ということですね。

現存在という存在の特徴としてまず、「現存在は、存在しなければならないというあり方をする」ということを挙げています。

次に、「現存在はおのれの存在において存在へとかかわりゆくことが問題であり、そうした存在はそのつど私のものである」という「各私性」ということを挙げています。

これらから、「現存在はそのつど本質上おのれの可能性」だとします。

現存在というのは、おのれの存在において、おのれ自身を選択し、獲得することができる。

逆に、おのれを喪失したり、獲得できなかつたり、たんに「外見上」獲得したりすることもある、と言います。

言い換えると、

「人間というものは、自分自身の『存在』というものを、自分でつかみとる、あるいはつかみとることができないものだ」

ということになるでしょうか。

と言っても、「存在」というものが何なのかということが『存在と時間』全体のテーマになっていて、現存在（人間）にとっての「存在」というものが何なのかということが第1部のテーマになっているので、ここではまだ「自分自身の『存在』」というものが何を意味しているのかはわかりませんね（どっちにしても第1部すら未完なんですけど…）。

この「現存在の可能性」として、「本来性」と「非本来性」というものがあるとします。

「非本来性」とは、「平均性」とか「日常性」のことであるということです。

「非本来性」というとマイナスのイメージを持ってしまいましたが、ハイデガーによると「多忙」とか、「活気がある」とか、「とても楽しい」とかいったような状態も含まれると言います。

ハイデガーの言う「非本来性」とは、「おのれの存在」から「逃避」したり、それを「忘却」したりという状態のことです。

人間誰しも、「自分の存在とは何なのか」ということをいつも考えているわけではないですよ。そんなことよりも、他に色々なことで充実した毎日を過ごしている。そんな状態のことを「現存在の非本来性」だとハイデガーは言います（決して非難しているわけではないので注意）。

ハイデガーによると、この「現存在の存在」ということについて、それまでの哲学者は誤った捉え方をしてきた、と言います。

どういうことかというと、机などの「物」と同じように考えてきた、というのです。

ここで、今回の範囲ではありませんが、ハイデガーによる「存在者」の区別について説明します。

「存在者」というのは、「存在するもの」全てを指します。

その中で、自らの存在についてかかわる存在者を①「現存在」と呼びます。ハイデガーによると、現存在は「人間」のみだとされます。

その他の存在者は、「現存在とされるにふさわしくない存在者」とされ、2つに区別されます。

一つは、②「手元存在者」です。

これは、現存在目線で言う「道具」です。

もう一つは、③「眼前存在者」です。

「ただ目の前にあるもの」ということですね。

例えば、私の携帯電話は私にとっては「手元存在者」ですが、他の人にとっては「眼前存在者」になるわけです（他の人は使えないので「道具」にならない）。

ハイデガーによれば、それまでの哲学では「現存在」①を「現存在とされるにふさわしくない存在者」②③と同じように考えてきてしまった、というのです。

ハイデガーは、それまでの哲学と比較する形で、この「現存在」というものの特徴について述べていきます。

つづく第2章のタイトルは、「現存在の根本機構としての世界内存在一般」です。

現存在の「根本機構」は、「世界内存在」だとハイデガーは言います。

「世界内存在」は3つに分けて考えることができると言います。

- 1) 「世界の内で」
- 2) そのつど世界内存在という仕方において存在している存在者
- 3) 「内存在」そのもの

上記の2) については、「現存在の平均的的日常性というあり方」において考えることができると言い、第1篇第4章「共存在および自己存在としての世界内存在 <世人>」というところで述べられます。

上記の3) については、「内ということ」の意味が明らかにされるべきであるとし、第1篇第5章「内存在そのもの」というところで述べられます。

今回の箇所ですく詳しく述べられているのは、1) 「世界の内で」について。

「～の内にある」というと、例えばコップの中に水が入っているというようなことをイメージします。

しかしハイデガーは、このことを「世界内部性」と表現します。

これに対して「世界の内にいる」とは、「世界のもとで、世界になじんで存在している」といったような意味だとします。

「なじむ」の他には、「住む」「滞在する」「世話する」「親しんでいる」といったような表現をしています。

また、「世界のもとでの存在」とは、「世界のうちに没入している」とも表現します。

「居心地がよい感じで、どっぷりとその場に浸かっている」みたいな感じですかねー。

その上で現存在は、「気遣い」という特徴を有するとハイデガーは言います。

この「気遣い」については第6章で詳しく述べられるのですが、「現存在とはいえない存在者（つまりモノ）」に対しては「配慮的な気遣い」をし、他の現存在（つまり他者）には「顧慮的な気遣い」をされると言います。

気遣いには、

- ・何かにかかわり合っている
- ・何かを作り出す
- ・何かを整理し世話する
- ・何かを役だてる
- ・何かを放棄し紛失する
- ・企てる
- ・やりとげる
- ・探知する
- ・問いかける
- ・考察する
- ・論じあう
- ・規定する

などなど、色んなあり方があるというのですが、一般的な意味での「辛苦、憂愁、生活の心配」などとは無関係ということです。

哲学の中でよく用いられる概念として「認識する」というものがありますが、ハイデガーはこれを「気遣いのひとつ」であるとします。

「主体（人間）が客体（他者やモノ、自然）を認識する」といった「主観・客観関係」ということを前提として組み立てられる哲学は多くありますが、ハイデガーは「それはあくまで一つの前提にとどまる」とし、注意を促します。

「世界」についても、「人間という主体」が「認識する」対象という捉え方をしてはならないということです。

それを伝えるために、

「認識作用は世界内存在としての現存在の一つの存在様態である」

と記述しています。

「認識」と似た言葉として「認知」というものがありますが、ハイデガーは「事物的存在者を認知する」と表現し、「或るものを或るものとして語りだしたり論じあったりする」という遂行様式を持っている」とします。これは、広い意味での「解釈作用」だとも言います。

（余談ですが、ハイデガーの存在論を発展させる形でゲオルク・ガダマーという哲学者が「解釈学」というものを確立します）

ちなみにハイデガーはここで、「眺めやり」ということの説明をしています。

「眺めやりとは、そのときどきに、何々をめがけて特定の方向を定めること、つまり事物的存在者に照準を合わせること」

なんだか、スナイパーみたいな感じですが、これはハイデガー流の「モノを認識する」ということのようなのです。

訳者の渡邊二郎さんは訳注の中で

「『視』という術語は、存在論的な意味での「認識」のことだと解してさしつかえない」

と書かれています。

ハイデガーにおいては、「視る」という表現を用いる際は、「認識する」ということを言っているのだという意味なんですね。

今回の箇所でも、「配視」という言葉が何度か出てきますが、これは「配慮的な気遣いにおける視」ということで、つまりは「モノを認識すること」という意味になります。

素直に「認識する」と言ってくれればいいのに、なんで「視」とか言うんだハイデガーさんよ…。

ちなみにハイデガーは、「視る」ことよりも「聴く」ことを重視しています。

後に「存在の声を聴く」「聴従する」といったような表現をしています。

確かに、「視る」って、もちろん「視ようとして視る」ということもありますが、「視えてしまう」（便利な北海道弁で言うと「視ささる」）ということも多いですね。

一方で、もちろん「聞く」ことについても、耳に入ってくるという意味で「聞こえてしまう」（北海道弁だと「聞かさる」）ということもありますが、別の感じで「聴く」というと、「聴こうとして聴く」といった感じになりますね。

「聴く」の旧漢字では耳へんの下に「王」という感じがついていて、つくりは「十」と「四」と「心」になっている。「聴」の感じのモデルは聖徳太子で、「耳を王様のようにして十四の心の一つにするように集中して聴く」ということなのだという説もあるようです。

この章のまとめとして、現存在というものの特徴を以下のように述べています。

現存在

- ・つねにすでに「外部」に存在している
- ・そのつどすでに暴露されている世界において出会われる存在者のもとで存在している
- ・対象のもとでこのように「外部に存在している」ときですら、正しく解された意味では「内面」に存在している
- ・認識をいとなむのは、世界内存在としての現存在自身なのである
- ・或るものを忘却したときには、以前認識されたものとあらゆる存在関係が一見消え去ってしまうように思われるが、そうした忘却さえ、根源的な内存在の一つの変様として概念的に把握されなければならない

また、現存在と認識作用との関係については、以下のように述べています。

・認識作用において現存在は、現存在のうちでそのつどすでに暴露されている世界へと
かかわる一つの新しい存在の現況を獲得するということである

・だが、認識作用が、世界というものとの主観の「交わり」をまずもって創り出すので
もなければ、この「交わり」の方も、主観に対する世界の影響から生ずるものでもない
うーん、なんとも難しいですね…。

今回の第2章で出された「世界内存在」というものについて、第3～5章で詳しく分析が
なされます。

第8回 第1部第1篇第3章「世界の世界性」

2020年7月1日（火） 10:30～12:00で、第8回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は第1部第1篇第3章「世界の世界性」でした。

課題図書に用いている原佑・渡邊二郎訳、中公クラシックス版『存在と時間』は全3巻となっており、今回の第3章と次回の第4章で第1分冊が終わります。

今回、レジュメ作成のために第3章を改めて読み直してみたら・・・

あれ？読んで読んで終わらない・・・

なんと、130ページもありました（第1分冊は全部で336ページ）。

そこから大慌てでレジュメ作成、書いても書いても終わらない・・・。

レジュメが完成したのは、開催前日でした。油断した・・・。

ちなみに次回の第4章は41ページ。ゆったりやります。

第3章で述べる「世界」は、第2章でハイデガーが現存在（つまり人間）の在り方の特徴として提案した「世界内存在」という概念を構成する一部分です。ちなみに、第5章は「内存在そのもの」というタイトルになっており、今回の「世界」と合わせると「世界内存在」になりますね。

私たちが普段「世界」と考えるとき、「世界中の国々」を思い浮かべたり、「地球」を思い浮かべたり、あるいは「身の回りの世界」を思い浮かべたりと、色々な対象が含まれていると思います。

ハイデガーはこの3章で「世界を現象として記述する」というのですが、上記で挙げたような「世界」の「外見」を描写したり、そこで起こってくるものを「物語る」ということをしても、本当の「世界」を記述したことにはならないということです。

それはなぜかと言うと、そういった記述の対象となっているのは、「世界の内部にある存在者」、つまり「諸事物」に限られるからだということです。

諸事物とは、 ①自然諸事物 ②価値の付着した諸事物 であると言います。

こういうものは、数学的物学的に捉えたり、価値というものを基準として捉えたりすることができますが、これは「世界の内部にある存在者」にすぎないのだと。

こういった「客観的存在としての存在者」は、「世界」というものを前提としているだけで、「世界」そのものではないのだと言います。

これらに加えて「世界の内にある存在者」、つまり「世界内存在」つまり「現存在（人間）」も含めて「世界」を考える必要があるのだとハイデガーは言います。

このことについてハイデガーは

「存在論的には『世界』は現存在自身の一つの性格」

だと表現します。

つまり、ハイデガーのように「存在」というものをしっかり考えるのであれば、世界とは現存在（人間）の「一つの性格」だということになるということです。

つまり、世界というものを考えるには、現存在の在り方を含めて考えなければいけないのだと。

では、どのようにその探究については、現存在の「平均的日常性という地平」のうちで行う必要があると言います。

この日常的現存在の最も身近な世界をハイデガーは「環境世界」と呼びます。

この「環境」という言葉の中に、「空間性」という考え方が含まれているとも言います。

この「空間」というものを考えるとき、例えば「縦が〇センチ、横が〇センチ、高さが〇センチ」ということをすぐに思い浮かべてしまいますが、そういった「拡がりのあるもの」としての世界の捉え方は、これまでの存在論、とくにデカルトの考え方を基盤としたもので、それではいけないとハイデガーは言います。

デカルトは「存在者」について

- ①拡がりのあるもの
 - ②思考するもの（つまり人間）
 - ③ただそれとしてあるもの（創作されたものでないもの）＝神
- という三つに分けます。

ハイデガーは、このような存在者の分類自体が誤っていると言うのです。

ハイデガーは人間を「現存在」と呼びますが、デカルトのように「思考するもの」とは考えません。

言いかえると、「認識する主体としての人間」と「認識される対象としての世界（自然）」という「主格二元論」という形で人間を捉えないということです。

現時点では私もちよっとわからないところなのですが、ハイデガーはこの「認識」というものを完全否定しているわけではないようなんですよね…。

ハイデガーの表現で、「視覚」にたとえた表現がときどき出てくるのですが、訳者の渡邊二郎さんによれば「視」というのは「存在論的な意味での認識のことととらえてよい」ということなんだそうです。今回の箇所でも、「配視」という表現が出てきます

が、「配慮的な気遣いによる視」ということのように、「存在者として認識すること」といった意味のようです。

ハイデガーは他に、「聴覚」にたとえた表現がときどき出てきます。例えば、「良心の呼び声」とか「聴き従う」とか。ハイデガーは、「視覚」を「存在者を認識すること」、「聴覚」を「存在をとらえること」として用いているような印象があります。

話を戻します。

今回の箇所ではハイデガーは、「道具的存在」というものを挙げています。「道具」は、人間が何かの目的に用いるものですね。

ハイデガーは「環境世界」の在り方についてこんな風に表現しています。

「現存在が道具的に存在している道具のもとに配慮的に気遣いつつ没入するとき、現存在自身は、配慮的に気遣われた世界内部的存在者とともこの存在者の世界性が或る種の仕方で現存在に閃いてくるような存在可能性をもっているのではあるまいか」

また、道具の在り方として、こんな風には書いています。

「最も身近に道具的に存在している存在者は、利用不可能なものとして、その特定の利用にはあつらえむきでないものとして、配慮的な気遣いのうちで遭遇されることがある」

「利用不可能だとそのように暴露されるときに、道具は目立ってくる」

私たちは、日々の生活の中で、色んな「道具」を使っていますが、普段はその道具の存在をあまり意識することはありません。でも、例えば、普段使っているスマートフォンが急に何かの理由で使えなくなった時、普段はあまり意識しないその道具が『目立ってくる』。

そんな風な「現存在と道具の関係性」が、環境世界の特徴だということです。

ところでハイデガーは今回の箇所では、色々な「道具」の例を挙げていますので、いくつかご紹介します。

・自動車の方向指示器（ウインカー）：運転手は配慮的な気遣い（操縦）のうちで道具として使用するが、車に乗っていない人は「避けたり、立ち止まったりして」この道具を使用している。

・ハンカチの結び目：記号自身が、おのれの目立つことを、日常きわめて「自明」に道具的に存在している道具全体の目立たなさのうちから取り出してくる

・眼鏡：眼鏡をかけている人にとっては、それが彼の「鼻のうえにある」ほど距離的には近いのだが、使用中のこの道具は、正面の壁にかかっている絵よりも、環境世界的にはずっと遠ざかっている

ハイデガーは、空間についても道具と同じように考え、以下のように述べます。

・空間は主観の内では存在しているのでもなければ、世界が空間の内では存在しているのでもない。むしろ空間は、現存在にとって構成的な世界内存在が空間を開示したかぎりにおいて、世界の「内」で存在している

・空間は、世界へと帰ってゆくときにはじめて概念的に把握されうる

・世界内存在というその根本機構に関する現存在自身の本質上の空間性に対応しつつ、空間が世界をなんとしてもともに構成しているというふうに、暴露されうるのである

最後にひとつだけ、これまで『存在と時間』を読んできた流れから考えると「あれ？」と思うような表現がなされている箇所があります。

「存在論的に十分によく了解された『主観』、つまり現存在が、空間的なのである」

デカルトの「主観－客観」図式を批判するハイデガー。人間を「主観」と誤って受け取らないよう、「現存在」という表現をしています。しかし「存在論的に十分によく了解された『主観』」であれば「現存在」であると言うのです。

デカルトに代表される、それまでの哲学者が打ち立てて来た哲学を「全否定」というのではなく、それらを批判し、深化させる、そして新しい「存在論」を作り上げる。それがハイデガーの狙いだったということですね。

後半のディスカッションでは、元設計士の参加者からソ連の建築家による「精神世界の建築」の紹介があったり、女性の参加者から「キッチンの設計」の話があったり、カメラの出現により変わったアートの世界の話があったり・・・。

初めて参加してくれたドクターは「話を聞いていて、ハイデガーはなんでこんなにめんどくさい考え方をするんだろうな、って思いましたが、自分の普段の生活にあてはめて考えると、確かにそうかもな、って思うところもあるような気がします」とコメントしてくれました。

あまりにもボリュームが多く、内容の理解も大変だった第3章「世界の世界性」。これからの生活の中で、私たちの環境世界の中で「閃いてくる」道具や空間とともに、ハイデガーのいう「世界の世界性」も閃いてくるといいなと思います。

第10回 第1篇第4章「共存在および自己存在としての世界内存在 『世人』」

2020年7月14日（火） 10:30～12:00で、第10回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は第1部第1篇第4章「共存在および自己存在としての世界内存在 『世人』」でした。

課題図書に用いている原佑・渡邊二郎訳、中公クラシックス版『存在と時間』は全3巻となっており、今回の第4章で第1分冊が終わります。

第2章で「現存在は世界内存在である」という主張がなされ、前回の第3章では「世界」についての分析がなされました。

今回の第4章では、「世界内存在としての現存在」に関して、「日常性において現存在であるのは誰であるのか」ということが分析されます。

この「誰か」を考える上で、ハイデガーは「自我とは何か」を考える必要があると言います。

それに加えて「他者とは何か」を合わせて考える必要があるとも言います。

デカルトやフッサールなどと異なり、ハイデガーは

「世界なしのたんなる主観というものが、差しあたっては『存在している』のではない」

「孤立的自我というものが多くの他者たちなしで与えられているのではない」

と言います。

つまり、「現存在」が存在するとき、そのつどすでに他の「共現存在」が存在しているのだと。

このように、他者と「ともに」存在しているという現存在の在り方を、「共存在」とハイデガーは呼びます。

世界の内において、現存在が現存在ではない存在者（つまり「モノ」）に関わるときの在り方を、「配慮的気遣い」とハイデガーは名づけていました。

ここでは、現存在が共現存在に関わるときの在り方を、「顧慮的気遣い」と名づけます。

突如としてここでハイデガーは、「顧慮的な気遣いの二つの極端な可能性」というものを挙げます。

①支配する顧慮的気遣い

- ・特定の他者から「気遣い」を奪取して、その他者に代わって配慮的な気遣いのうちに身を置き、その他者のために尽力する

- ・配慮的に気遣われるべき当のことをその他者に代わって引き受ける

- ・その他者はそのさいおのれの場面から追い出され、身を退くことによって、その結果、配慮的に気遣われたものを、意のままになるように仕上げられたものとして後で受け取る or 配慮的に気遣われたものからまったくまぬがれる

- ・そうした顧慮的な気遣いにおいてはその他者は、依存的で支配をうける人になる

- ・この支配は暗黙のうちのものであって、支配を受ける人には秘匿されたままのこともある

- ・尽力して「気遣い」を奪取してやるこうした顧慮的な気遣いは、相互共存在を広範囲にわたって規定しており、たいてい道具的存在者の配慮的な気遣いに関係している

②解放する顧慮的気遣い

- ・特定の他者が実存的に存在するというあり方の点でその他者に手本を示すような顧慮的な気遣い

- ・その他者に「気遣い」を気遣いとしてまず本来的に返してやる

- ・本質的には本来的な気遣い（特定の他者の実存）に関係するのであって、他者の配慮的な気遣いの対象になっているものに関係するのではない

- ・その他者を助けて、その他者がおのれの気遣いのうちにあることを見通し、おのれの気遣いに向かって自由になるようにさせる

「極端な可能性」と言っているので、必ずいずれか一つになる、ということではないのですが、他者を支援する仕事をする私たちのような立場の者にとっては、非常に示唆に富む箇所であるように思います。

「日常的な現存在とは誰か」という問いに対してハイデガーは、それは「世人（せじん）」であると言います。

ドイツ語の言語では Das Man 他の訳書では<ひと>と訳したりしています。

英語の訳書では They と訳されているものもありますが、これだと「彼／彼女ら」になってしまうので、「自己」が除かれてしまう感じがしますね。

ハイデガーの言う「世人」あるいは<ひと>は、「自己と他者の境界が無くなった状態」というものです。

ハイデガーの言う「世人」の特徴を列記します。

- ・日常的な相互共存在において差しあたってたいてい「現にそこに存在している」当のもの

・このひとでもなければ、あのひとでもなく、そのひと自身でもなく、幾人かのひとでもなければ、また、すべての人々の総計でもない

・中性的なもの

・公共的な交通機関を使用するときや、報道機関（新聞）を利用するときなど、あらゆる他者が他者そのものと同然 → おのれに固有な現存在を、「他者たち」という存在様式のうちへと完全に分解してしまう → このように目立たず確認しがたいことのうちで、世人はおのれの本来的な独裁権をふるう

・われわれは、ひとが楽しむ通りに楽しみ興ずる。ひとが見たり判断したりするとおりにする

・世人はおのれに固有な存在する仕方をもっている = 平均性：懸隔性と名づけた共存在の傾向の根拠は、相互共存在そのものが平均性を配慮的に気遣っていることのうちにある

・世人にはおのれの存在においてこの平均性へと本質的にかかわりゆくことが問題

・あえてなされうるし、またなされてよいことが、その下図をそこに描かれているこうした平均性は、でしゃばってくるあらゆる例外を監視する。あらゆる優位は音もたてずに押さえつけられる。すべての根源的なものは、一夜のうちに平滑にされて、とっくに熟知のものになる。すべての戦いとられたものは手ごろなものになる。

またハイデガーは、この「世人」と「現存在」の関係について、以下のように述べます。

世人はいたるところに居合わせている

⇒ しかしそれは、現存在が決断を迫るときには、いちはやくつねにこっそりと逃げ出す

⇒ 世人は、すべての判断や決断を前渡ししておくゆえ、そのときどきの現存在から責任を取り除いてやる

⇒ 世人はいとも容易にすべてのことの責任を負いうるのだが、それは、誰ひとりとして或ることのために責任をもつ必要のある者ではないから

⇒ 世人は、その日常性におけるそのときどきの現存在の責任を免除する

⇒ 現存在のうちには安請けあいや軽率な振るまいへの傾向がひそんでいる

⇒ 世人は存在免責をもってそのときどきの現存在に不断に迎合するゆえ、世人はおのれの執拗な支配を保ちつづけ強化する

ハイデガーが言うには、平均的日常性において現存在は、このような「世人」というあり方をしていると言うのです。

ディスカッションではまず、「二つの極端な顧慮的気遣い」について議論になりました。

障害当事者と支援者の関係について、「支援」しているつもりが「支配」することにつながることもある、などなど…。

親と子の関係にも言えることがありそうだと、という話にもなりました。

また、「世人」という概念についても議論になりました。

オルテガ・イ・ガセットが『大衆の反逆』で述べた「大衆」だったり、福沢諭吉が英語のcitizenを「市民」と訳したことだったり、他の思想家も同様な問題について検討している、という話になりました。

ハイデガーが『存在と時間』を公刊したのが第1次世界大戦後の1927年、その後ハイデガーがいたドイツは「世人」が追従する形でヒトラーとナチスを生み、ハイデガー自身も一時はナチスに加担していく…。

色々、考えてしまいます。

今回は、『存在と時間』の中で唯一と言ってよいほど、「他者」ということについて述べられた箇所でした。

分量が少ないこともあり、読みやすかったです。

課題箇所は、いよいよ第Ⅱ分冊に入り、第5章「内存在そのもの」です。

この章も、「世界の世界性」と同じく、120ページ超とかなりの分量になっています。

前回と同じ轍は踏まない！ということで、2回に分けます。

第12回で前半の「A. 現の実存論的構成」

第14回で後半の「B. 現の日常的存在と現存在の頽落」

を扱います。

第12回 第1篇第5章「内存在そのもの」前半

2020年7月28日（火） 10:30～12:00で、第12回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は第1部第1篇第5章「内存在そのもの」の前半を扱いました。

課題図書に用いている原佑・渡邊二郎訳、中公クラシックス版『存在と時間』は全3巻となっており、今回の第5章から第Ⅱ分冊が始まります。

ハイデガーは、人間を「現存在」と定義し、現存在の特徴を「世界内存在」であるとします。

その「世界内存在」を構成する要素を分析するのが、第3章から第5章です。

第3章では「世界」、第4章では「共存在および自己存在」、そして今回の第5章では「内存在」という要素について分析します。

第5章の「内存在そのもの」の内容は、二つに分かれます。

A. 現の実存論的構成

B. 現の日常的存在と現存在の頽落

ハイデガーがよくやる書き方ですが、最初にその概念がどのように構成されているかということについて述べ、次にその概念が「平均的日常性においてどのような在り方になっているか」ということについて述べます。

今回は「A. 現の実存論的構成」を扱いました。

「現」とは、「ここ」とか「あそこ」のことであると言います。

「現」の在り方というのは、「明るみ」という特徴を持つと言います。

そして、「現存在」とは、おのれの「開示性」であるとします。

「現存在は、他の存在者によって明るくされているのではなく、おのれ自身が明るみである」とも言います。

現であるという構成的な在り方として、等根源的な要素を三つあげます。

①情状性

②了解

③語り

第5章の前半部では、この三つの要素について述べられます。

1) 情状性

情状性とは、一般的には「気分」と呼ばれるものです。

現存在は、否が応でも存在しているという事実があり、それをハイデガーは「被投性」と名づけます。イメージとしては、世界の中に投げ込まれてしまっている、という感じでしょうか。現存在は、ただ投げ込まれてしまっているだけでなく、「情状性において開示されている」、つまり何らかの気分とともにある、と言います。

ここでハイデガーは、「重荷を負っているという現存在の性格は気分のうちであらわになる」という表現もしています。この「重荷を負う」というのは、今後また繰り返される表現なのですが、ここではこれ以上触れません。

ハイデガーはこの「情状性」の例として、「不機嫌な気分」を挙げます。

・不機嫌な気分においては、現存在はおのれ自身に対して盲目になる → そういう状態、よくありますよね。

・配慮的に気遣われた環境世界はヴェールをかぶり、配慮的な気遣いの配視は誤り導かれる → イライラしていて余裕が無いようなとき、周囲に対する配慮が不足し、エラーを起こしてしまうということもよくありますね

・情状性は、配慮的に気遣われた「世界」に無反省に身をまかせ引き渡されているときにこそ現存在を襲う → 自己や他者の事を慮る（ハイデガーが言うところの顧慮）ことができず、モノやコトにばかり気をとられているときに、急にイライラしてしまったりすることはありますよね

・気分は「外」から来るのでもなければ「内」から来るのでもなく、世界内存在という在り方として、世界内存在自身からきざしてくる → これがちょっとわからないんですよ・・・。気分は「現存在を襲う」んだけど、「外」から来るのではなく、でも「内」から来るのでもない…。

このほかハイデガーは、情状性の一つの様態として「恐れ」を取り上げています。

「恐れ」というものには、対象があると言います。

それに対して、次の第6章以降で出てくる「不安」については対象がない、と言うのですが、それはまた今度。

ちなみにハイデガー、「恐れ」が変化したものとして下記のようなものを挙げています。

・何か熟知の親しいものが突如として入り込んでくることによって起こる「恐れ」 = 驚愕

・全然親しくないものによって脅かされることで起こる「恐れ」 = 戦慄

・戦慄でかつ突如性をもつ「恐れ」 = 仰天

・そのほかの「恐れ」 = 尻込み、おじけ、気がかり、びっくり

ハイデガー、絶対ニヤニヤしながら書いてるよね…。

2) 了解

「現存在が存在しているための目的であるものにおいて実存しつつある世界内存在そのものが開示されている。こうした開示性が了解と名づけられている」

相変わらず難しい表現ですね…。

現存在つまり人間が存在している「目的」があるとして、「実存しつつある」=その目的への可能性に近づいている過程で、「世界内存在そのもの」=人間の性質が「開示されている」=明らかになっている。そのように開示されている状態が「了解」だと言うことでしょうか。

ここでハイデガーは「可能性」について言及しています。

この「可能性」に関して、現存在の特徴を次のように挙げます。

- ・おのれ自身に委ねられている可能存在
- ・徹頭徹尾被投された可能性
- ・おのれの最も固有な存在しうることに向かって自由であるという可能性
- ・おのれの存在しうることに対して、おのれがとるべき立場を「知っている」

さらにここで、『存在と時間』の中でも重要な概念のひとつである「企投」が登場します。

- ・了解は企投と名づける実存論的構造をそれ自身おびている
- ・了解は、現存在のそのときどきの世界の世界性としての有意義性をめがけて、現存在の存在を根源的に企投する
- ・企投は、投げることに於いて、可能性を可能性としておのれのためにまえもって投げ、それを可能性として存在させる
- ・現存在は、おのれがそれに成る当のもの、ないしはそれに成らない当のものであるゆえにのみ、現存在は了解しつつおのれ自身にこう言うことができる ⇒ 「汝があるところのものに成れ！」

現存在が自身の可能性に対して自身の存在を「投げ入れる」のが企投ということになるでしょうか。

そしてさらに、現存在の了解の特徴を挙げます。

- ・差しあたってたいいは、おのれの世界のほうからおのれを了解しうる
- ・そうでない場合には、了解は、第一次的には、目的であるもののうちへとおのれを投げ入れる。言いかえれば、現存在自身として実存する

ここで、これもまた『存在と時間』において重要な「本来性」という用語が出てきます。

了解の二つの可能性として、

①おのれの固有な自己そのものから発現する本来的な了解

②非本来的な了解

があるとします。

ここで注意が必要なのは、「本来性」と「非本来性」については、道徳的な善し悪しではないということです。

その人固有のものなのか、そうではなく他の人からきたものなのか、という区別をしているだけ、ということです。

次の第32節は「了解と解釈」というタイトルになっています。

「了解の企投するはたらきは、おのれを完成するという固有の可能性をもっている」とし、「了解の完成」が解釈だと言います。

・解釈というかたちをとって了解は、何か他のものになるのではなく、おのれ自身になる

・解釈は、了解されたものを承知することではなく、むしろ、了解において企投された諸可能性を仕上げること

解釈においては、あらかじめ「～として」という構造があると言います。

後に「解釈学的状況」と名づけられ、ハイデガーの弟子であるガダマーによって発展される概念です。

解釈における3つの「予」構造

①予持： 道具的存在者を解釈するときには、その道具的存在者がいかなる適用のもとで道具でありうるかをあらかじめ所持している

②予視： 解釈するための視点をあらかじめ定めている

③予握： その道具的存在者の何であるかをあらかじめ概念的に把握している

そしてここで「意味」という概念が登場します。

・或るものの了解可能性がそのうちに保たれている当のもの

・了解しつつ開示することにおいて分節可能であるもの

・意味は、予持・予視・予握によって構造づけられている企投の基盤

・現存在だけが有意味であったり、無意味であったりすることができる

そして、了解には循環構造があると言い、それは「解釈学的循環」と名づけられます。

- ・意味の構造に属している
- ・「循環」というこの現象は、現存在の実存論的機構のうちに、つまり解釈しつつ了解することのうちに根づいている
- ・世界内存在としておのれの存在自身へとかかわりゆくことが問題である存在者は、一つの存在論的な循環構造をもっている

続く第33節は「解釈の派生的様態としての陳述」

陳述とは「判断」のことです。

- ・陳述で論証されうるのは、了解と解釈とにとって構成的な「として」構造がいかなる仕方において変様されうるのかということ

陳述の3つの意義を以下のように述べます。

- ①提示： 存在者をその存在者自身のほうから見えるようにさせる
- ②述語： 主語が述語によって規定される、述語しつつ分節化する
- ③伝達： 腹藏なく言うこと、規定するという仕方において提示されたものを共に見えるようにさせる、他者と共に分かちつつ伝達する

3) 語り

「現」という構造の最後の構成要素は「語り」です。

- ・情状性および了解と実存論的に等根源的
- ・語りは了解可能性の分節化
- ・語りのうちで分節可能なもの = 意味
- ・語りつつ分節することのうちで分節されたものそのもの = 意義全体

そして「言語」とは、「語り外へと言表されたもの」としてとします。

以下、語りや言語について、ハイデガーが述べる順番に紹介していきます。

語ること

- ・世界内存在の了解可能性を「有意義化しつつ」分節すること
- ・この世界内存在には共存在が帰属している
- ・世界内存在の開示性を共に構成しており、おのれに固有な構造の原型を世界内存在という現存在のこの根本機構をつうじて与えられている

伝達 Mitteilung

・実存論的に原則的に解された伝達において、了解しつつある相互共存在の分節化が構成される

⇒ そうした分節化が、共情状性と、共存在の了解内容を「分かち合う」ことをなしとげる

・共現存在は、共情状性と共了解のうちで本質上すでにあらわになっている

・共存在は語りにおいて「表立って」分かち合われる

語り

・おのれを言表するという性格

・語りつつ現存在はおのれを外へと言表する

・現存在が世界内存在として了解しつつすでに「外部に」存在している

・語りには情状的な内存在の表明が属している

⇒ 音声の抑揚・転調、語り方のテンポ、発現の仕方のうちにこうした表明の言語上の指標がひそむ

⇒ 情状性の実存論的な諸可能性の伝達、言いかえれば実存の開示は、「詩作的な」語りの固有な目標になりうる

さらにハイデガーは、語りつつ発言することに属する可能性として、「聞くこと」と「沈黙すること」を挙げます。

聞くこと

・語ることにとって構成的

・誰かの言うことを聞くことは、共存在としての現存在がその他者に向かって実存論的に開放されて存在していること

・それどころか聞くことは、あらゆる現存在がたずさえている友の声を聞くこととして、現存在がおのれの最も固有な存在しうることに向かって第一次的に本来的に開放されていることをすら構成している

・現存在は聞く = 現存在は了解するからである

・他者たちと共なる了解しつつある世界内存在として現存在は、共現存在とおのれ自身とに「聞きつつ聴従して」いる

・この聴従においてそれら両者に耳を傾けつつ帰属している

※傾聴する

✕騒音、音のざわめき

○きしむ車、オートバイ

○行軍中の縦隊、北風、木をたたく啄木鳥、ぱちぱちいう火

○「聞くことができない」ので「感ずるよりほかない」人は、おそらくきわめてよく傾聴することができる

※聞きまわってばかりいること = 聞きつつ了解することの一つの欠性態

✖多くを語る、忙しく聞きまわる

○すでに了解している人だけが耳を傾けて聞くことができる

沈黙すること

・たがいに共に語りあっているとき沈黙している人は、言葉のつきない人よりもいっそう本来的に、「了解させるように暗示する」ことができる

・或ることにに関して多弁をろうしたからとて、それによって了解内容がさらに深まるという保証は、いささかもない

・くぐぐと語りまくることは、隠蔽することであって、了解されたことが明瞭になったと見せかけるにいたる

・常套語によって了解しがたくしてしまう

・沈黙することは物言わぬことではない

・真正に語ることにのみ、本来的に沈黙することが可能

・沈黙しうるためには現存在は、言うべき何ごとかをもっていなければならない

= おのれ自身の本来的な豊富な開示性を意のままにすることができなければならない

・そのときに黙秘はあらわなしめるのであり、「空談」を押さえる

・黙秘は、語ることの様態として、現存在の了解可能性をきわめて根源的に分節する

・真正の聞きうることと透明な相互共存在とがそうした黙秘から生ずる

「或ることにに関して多弁をろうしたからとて、それによって了解内容がさらに深まるという保証は、いささかもない」とか、

「くぐぐと語りまくることは、隠蔽することであって、了解されたことが明瞭になったと見せかけるにいたる」とか言われると、

もともと早口でたくさん喋る身として「グサッ！」ときますね（笑）

第14回 第1篇第5章「内存在そのもの」後半

2020年8月11日（火） 10:30～12:00で、第14回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は第1部第1篇第5章「内存在そのもの」の後半を扱いました。

ハイデガーは、人間を「現存在」と定義し、現存在の特徴を「世界内存在」であるとします。

その「世界内存在」を構成する要素を分析するのが、第3章から第5章です。

第3章では「世界」、第4章では「共存在および自己存在」、そして今回の第5章では「内存在」という要素について分析します。

第5章の「内存在そのもの」の内容は、二つに分かれます。

A. 現の実存論的構成

B. 現の日常的存在と現存在の頽落

ハイデガーがよくやる書き方ですが、最初にその概念がどのように構成されているかということについて述べ、次にその概念が「平均的日常性においてどのような在り方になっているか」ということについて述べます。

今回は「B. 現の日常的存在と現存在の頽落」を扱いました。

前半のAでは、現であるという構成的な在り方として、等根源的な要素を三つあげます。

①情状性

②了解

③語り

第5章の後半部Bでは、これら三つの要素の「平均的日常性における在り方」が述べられます。

ここでいつもの「なんでなのハイデガー？」ということで、なぜか逆の順番で述べられます（笑）

①空談 : 平均的日常性における語り

②好奇心 : 平均的日常性における了解

③曖昧性 : 平均的日常性における情状性

ひとつずつ説明していきます。

①空談 : 平均的日常性における「語り」

訳によっては「噂話」と訳してあるものもあります。

他の人が言っていることを耳にして、それをそのまま他の人に伝える、というものですね。

ハイデガーは、このような空談は「根こそぎにされた現存在の了解内容という存在様式」であるといいます。

このような空談は、もともと「地盤のうえに生え抜いてはいない」もので、「語りまねと語り広め」、あるいは「なぐり書きされたもの」を「読みかじり」することでどんどんと広まり、ついには「完全に地盤を失う」と言います。

②好奇心 : 平均的日常性における「了解」

これは「視」という気遣いが、「滞留しないこと」、「新しい諸可能性のうちへと気散じ」ること、つまり、次から次へと色んな物やことに気をとられるといったような状態です。

さらに、それらのことを「わかったような気になってしまっている」ような状態のことです。

このような「空談」や「好奇心」により、現存在は「本物だと思い誤られた、生き生きとした生活」を得ると言います。

③曖昧性 : 平均的日常性における「情状性」

曖昧性というのは、「何が真正の了解のうちで開示されているものであり、何がそうでないものであるかは、もはや決せられなくなる」ような情状性のことだと言います。こうした曖昧性は、「世界へと伸び拡がっているばかりではなく、同じく相互共存在そのものへと、それどころか、おのれ自身へとかかわる現存在の存在へも伸び拡がっている」と言います。

また、この曖昧性は、「すべてのものが、真正に了解され、捕捉され、発言されているような外見」を呈しているにもかかわらず「根本においてはそうではない」という特徴をもちます。

これらの「空談」「好奇心」「曖昧性」という在り方は、日常的に現存在がおのれの「現」である在り方、つまり、世界内存在の開示性である在り方を性格づけているとし、これのことを「頹落」とハイデガーは名づけます。

頹落

- ・現存在が差しあたってたいていは配慮的に気遣われた「世界」のもとに存在していること
- ・何かのものに没入しているということは、多くは、世人の公共性のうちへと現存在が喪失されているという性格をもっている

・現存在は、本来的な自己存在しうることとしてのおのれ自身から、差しあたってすでに脱落してしまって、「世界」に頹落してしまっている

・「世界」への頹落性は、相互共存在が空談と好奇心と曖昧性とによって導かれているかぎり、こうした相互共存在のうちに没入しているということを指す

・非本来的な世界内存在は、「世界」と、世人というかたちをとった他者たちの共現存在とによって、完全に心を奪われている

・おのれ自身ではないということが、本質上配慮的に気遣いつつなんらかの世界のうちに没入している存在者の積極的な可能性として、その機能を果たしている

このような「頹落」によって現存在が陥ってしまう思い誤りとして、以下のように述べます。

・世人の自信や決然たる態度が、本来的な情状的了解に関して、こうした本来的な情状的了解は不必要だという考えをますます広める

・完全な真正の「生活」を養い導いているのだという世人の思い誤りが、万事はそのため「このうえなくうまくいって」おり、だからあらゆる門戸がそれにとっては開かれているという安らぎを、現存在のうちへと持ち込む

・頹落しつつある世界内存在は、おのれ自身にとって、誘惑するものであると同時に安らぎをえさせるものなのである

・非本来的存在におけるこうした安らぎは、静止や無活動へと誘導するのではなく、制止のきかない「活動」のうちへと駆り立てるのである

・安らぎをえて、万事を「了解しつつ」、このようにおのれを万事と比較することのうちで、現存在は疎外へ吹き流されるのだが、この疎外においては最も固有な存在しうることは現存在には秘匿されている

・頹落しつつある世界内存在は、誘惑し安らぎをえさせるものとして、同時に疎外させるものでもある

またもや、グサッとくるような内容ですね…。

ここにきてハイデガーは、「疎外」という概念についてとりあげます。

「疎外」というと、一番有名なのはカール・マルクスによるものなのですが、それとは無関係なもののようにです。

ハイデガーの言う疎外とは、頹落という状態に陥ることにより、現存在の「本来性」や「可能性」を、奪い去ってしまうような状況のようです。現存在はそれによってむしろ「安らぎをえる」と言っています。

現存在のこうした「動性」をハイデガーは「転落」と名付けます。

「現存在は、おのれ自身から、おのれ自身のうちへと、つまり、非本来的な日常性の無地盤性と空虚性のうちへと、転落する」のですが、「この転落は「上昇」や「具体的な生活」だと解釈されるほどなのである」とも言います。

「世人というかたちをとった非本来的存在の無地盤性のなかへの転落」により、現存在は「万事を所有しているとか達成しているとかいう安らぎをえた思い誤りのうちへと」引き込まれ、「本来性から不断にもぎ離しながらも、しかも本来性だとならぬに思い違いをさせる」といい、こうした「頹落の動性」を「旋回」として性格づけていると言います。

注意してほしいのは、ハイデガーは道徳的あるいは規範的に「頹落は良くない」「非本来性は良くない」といつているのではないということです。

「現存在は、それにとっては了解しつつある情状的な世界内存在へとかかわりゆくことが問題であるゆえにのみ、頹落することができる」のだと言います。

そして、

「逆に、本来的実存は、頹落しつつある日常性のうへに浮動しているものではなく、実存論的には、そうした日常性が変様されてつかみとられたものにすぎない」

と言います。

つまり、「頹落」という在り方になっている「日常性」が「変様される」ことで「つかみとられる」のが「本来的実存」だということです。

つまり、変えるべき「日常性」をまずはしっかりと捉えた上で、「本来的実存をつかみとる」ためにその「日常性」を変えなければならないということです。

では、どのように「日常性を変様させる」のでしょうか。

それについては、第2篇まで待つ必要があります。

第2篇に進む前に、現存在の存在を包括的に、現象学という学問によって解釈する必要があると言います。

そして、現存在を「気遣い」として解釈する必要があると言いますが、それについては次の第6章で分析されます。

ディスカッションの中では、「ママ友同士の噂話」や「ワイドショー」などについて「空談」や「好奇心」に関連付けて議論がなされました。

また、あくまで「一時的な仮説」にしかすぎない「科学的知識」に基盤を置こうとする人々の姿勢について、「人間は不安に耐えられないから何かにすがりたい」のだということ、でも本来はその「不安」とともに生きる「覚悟」が必要なのだと思う、という意見が出されたりしました。

実はこの「不安」というのは次の第6章で述べられる概念で、「覚悟」というのも第2篇で出てきます。

第16回 第1篇第6章「気遣い」前半

2020年8月25日（火） 10:30～12:00で、第16回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は第1部第1篇第6章「現存在の存在としての気遣い」の前半を扱いました。

ハイデガーは人間を「現存在」と呼び、その存在の在り方を「世界内存在」と説明しました。

第3～5章では、世界、自己、他者、内存在というものについて説明してきました。

今回の第6章では、現存在の在り方の「全体性」を考える上で必要な「設計図」として、「気遣い」という概念を新たに提示します。

「気遣い」に関する説明を始める前に、ハイデガーは「根本情状性」としての「不安」についての説明から始めます。

「情状性」というのは、第5章で述べられた「内存在」の3つの在り方の一つでした（他は、「了解」と「語り」）。

情状性とは、一般的には「気分」と呼ばれるものです。

その情状性の根本的なものの一つが「不安」だと言うのです。

平均的日常性において「自己」は、「世人」という、他の人と区別がつかないような在り方に「頹落」しており、配慮的に気遣われた「世界」のもとに没入している、ということが述べられていました。

言い方を変えると、「本来的な自己」から逃げるように、「世人」という在り方に頹落しているということです。

なぜ「頹落」が起こるのか、つまり、なぜ人間は「本来的な自己」から目を背け逃げてしまうのか、ということの理由が「不安」にあるのだとハイデガーは言います。

「不安」に似た情状性（気分）は、「恐れ」です。ただし、「恐れ」は、具体的な存在者を対象として持ちます。

例えば、「熊が怖い」とか、あるいは「来週のテストが怖い」といったようなことです。

これと比較して「不安」は、はっきりとした対象を持たないと言います。

逆に、「不安」の対象は、「世界内存在そのもの」だと言うのです。

普段、身の回りに色々な道具や、様々な事柄、そして「他者」があり、その状況に「なじんでいる」わけですが、あるときそれらが急に「なじんでいない」、つまり、「無意義である」といったような気分にも襲われることがあります。

それまでなじんでいた「世界」から弾き飛ばされてしまったように、「自分だけが独りになったような気分」になる、それこそが「不安」だと言うのです。

そのような状況を、ハイデガーは以下のように述べます。

- ・不安は、現存在の本来的な世界内存在しうることをめがけて、現存在を投げ返す
- ・不安は、現存在の最も固有な世界内存在へと現存在を単独化する

しかしながらこの「不安」は、現存在に「自由」をもたらすと言います。

・最も固有な存在しうることへとかかわる存在を、言いかえれば、おのれ自身を選択し把握する自由に向かって自由であることを、現存在においてあらわにする

・現存在が何かに向かって自由であることに、つまり、現存在がつねにすでにそれである可能性としての現存在の存在の本来性に、現存在を当面させる

つまり、それまでなじんでいた（「世人」という形で頹落して存在していた）「世界」から「不安」によって「単独化」という状態にされ、そこから自分自身の本来の可能性をつかみとる（あるいは再び頹落した状態に逃げる）ことができる状況に置かれるということです。

「自らの可能性をつかむ」ということは、「今の自分」より先のことを考えることでずす。

現存在の中にある、このような「自らに先立つ」という在り方のことを、ハイデガーは「気遣い」と呼びます。

平均的日常性においては、「世人」という形で「世界」に「配慮的な気遣い」をしているため、

「可能性に対して盲目になり、『現実的』でしかないもののもとで安らぎをえてしまう」

のだと言います。

本来的自己への「気遣い」と似ているがそうではないものとして、ハイデガーは以下をあげます。

・意欲： 意欲されているのは積極的な新しい諸可能性ではないのであって、むしろ、意のままになるものが、何か重要なことが生起しているという見せかけが生ずるような仕方で、「戦術上」変化させられる

・願望： 世人の指導のもとで安らぎをえた「意欲」。願望は了解しつつおのれを企投することの一つの実存論的な変様なのだが、そうした企投は、被投性に頹落しているのに、諸可能性にもっぱら依然として専心している。そうした専心は諸可能性を閉鎖する

・性癖： 頹落しつつある専心は、現存在がその内でそのつど存在している世界によって「生かされ」ようとする現存在の性癖をあらわにする

・渴望： 「生きようとする」渴望は、おのれ自身のほうから衝撃をたずさえてくる「へと向かっていく」ことなのである。渴望は他のもろもろの可能性を押しつけようとする

また、「心配」とか「憂慮」というものは、「気遣い」を存在的に（存在論的にではなく）理解したものだと言います。

ハイデガーは、「気遣い」の目的（しわざ）を、以下のように述べます。

・人間の完成、つまり、人間がおのれの最も固有な諸可能性に向かって自由であること（企投）においてそれでありうる当のものに成ること

ちなみに、「気遣い」は他の訳書では、「関心」と訳しているものもありますね。

「関心」だと、何となく「興味をもつこと」的な、認識的なニュアンスが前面に出るような気はしますね。

もちろん、「気づかい」も同じと言えば同じなのですが、「気遣い」と漢字で表記するとなんとなく「自らに先立ってあること」というのがイメージできるような気がしません。

第18回 第1篇第6章 「気遣い」 後半

2020年9月8日（火） 10:30～12:00で、第18回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は第1部第1篇第6章「現存在の存在としての気遣い」の後半を扱いました。

ハイデガーは人間を「現存在」と呼び、その存在の在り方を「世界内存在」と説明しました。

第3～5章では、世界、自己、他者、内存在というものについて説明してきました。

今回の第6章では、現存在の在り方の「全体性」を考える上で必要な「設計図」として、「気遣い」という概念を新たに提示します。

後半部分の構成は

第43節 現存在、世界性、および実在性

- (a) 「外的世界」の存在と証明可能性との問題としての実在性
- (b) 存在論的問題としての実在性
- (c) 実在性と気遣い

第44節 現存在、開示性、および真理

- (a) 伝統的真理概念とその存在論的な諸基礎
- (b) 真理の根源的現象と伝統的真理概念の派生性
- (c) 真理の存在様式と真理前提

という風になっています。

ここまで読んできて感じるのですが、『存在と時間』は非常に難しい本とされているものの、実はハイデガーは「これから何を話しますよ」とか、「こんな構成で分析していきますよ」というのを毎回きちんと提示してくれているんですよね。また、次の章に進むときも必ず「次はこのような問いに対して答えていきます」ということを示しています。

ハイデガーは『存在と時間』のような「公刊著作」に加えて、「講義録」というものがたくさんあるんです。

「講義録」のほうは、ハイデガーが講義で語った通りに文章化されているのですが、『存在と時間』などの「公刊著作」と比較すると非常に読みやすいです。

でも、だいたい途中で終わってる（笑）

自分が掲げる構想に、自分の書く能力、語る能力が追い付いていなかったんでしょうかね。

さて、第6章後半の議論に話を戻します。

まず第43節では、現存在と世界性、そして「実在性」の概念について検討しています。

「実在性」というのは、私たちが普通に考える「存在している」ということ、つまり「目に見えてそこにある」ということです。

歴史上の哲学者たちも、「実在性」というものが「存在」なのだと述べてきました。

デカルトしかり、カントしかり。

でもハイデガーは、そうではないのだと言います。

「目に見えてそこにある」ということ的前提には常に「見る主観」がある。

さらにその前提には、デカルトの有名な「我思う、ゆえに我あり」という考え方があ
る。

ハイデガーはこの考え方を批判するのです。

ハイデガーは「我存在す、ゆえに我思考す」へと逆転する必要があると言います。

第6章の前半でハイデガーは、現存在の特徴として「気遣い」をあげました。

この「気遣い」とは、常に自身の「先に立っている」というものです。

「実在性」というものは、この「気遣いに依存している」とハイデガーは言います。

だから、「実在性」 = 「存在」ということにはならないのだと。

ここでハイデガーはもう一つ、非常に気になる表現をしています。

「現存在が存在しているかぎりにおいてのみ、言い換えれば、存在了解の存在的な可能性が存在しているかぎりにおいてのみ、存在は「与えられている」

これは、ハイデガーの「存在の思索」における、「現存在中心主義」とも言えるでしょう
か。

後にハイデガーは自身の思索において「転回」を果たし、「存在中心主義」にシフトし
ていくこととなります。

第44節では、現存在と開示性、そして「真理」について分析されています。

開示性というのは、第5章で分析された「内存在の特徴」でした。

それと「真理」が関わっていると言うのです。

ハイデガーは古代ギリシアの哲学を重視しているのですが、パルメニデスやアリストテレスなどは「真理」を「事象」つまり「おのれ自身を示すもの」として捉えていたと言います。

ギリシア語で「真理」は「アレーテイア」と言うのですが、ここでハイデガーお得意の「言葉遊び」が登場します。

ギリシア語で「レーテー」とは「秘匿性（隠されていること）」あるいは「忘却」と言います。

また、ギリシア語で「ア」は打消しの接頭辞です。

「ア・レーテー」は「隠されていること／忘れ去られていることの打消し」ということになり、

真理 = アレーテイア = 「暴露されていること」

になるのだと言います。

つまりは、現存在で言うところの「開示性」と同じようなことですね。

しかしながらその後の哲学者たちは、これとは違う「伝統的真理概念」を作り上げてきたのだとハイデガーは批判します。

批判の対象になっているのは、中世のカトリック神学者であるトマス・アクィナス、近世ドイツのカント、そして近代（ハイデガーにとってはほぼ「現代」）の新カント学派です。

彼らは、真理とは「認識とその対象との一致」だとします。

また、陳述においては「AはBである」ということにおいてAとBが一致しているということが真理なのだということです。

ここでハイデガーは、お得意の「面白い例え」をあげます。

- ・誰かが壁に背を向けて「壁にかかっている絵は斜めだ」という真なる陳述をください
- ・その人が振り返って斜めにかかっている壁の絵をみて自分の陳述が明らかだということを示す

このとき、最初の「陳述」は「真理」だと言えるのか？とハイデガーは問うのです。

伝統的真理概念のように、「一致」が「真理」の根拠だとするのであれば「真理」だということになるでしょう。

でもハイデガーは、そうではないのだと言います。

壁の絵の例でいえば、陳述する人が、「壁の絵」という「存在者」についての「被暴露性」において陳述し、提示し、「見えるようにさせる」ことをしているのだと。こうい

った「現存在の存在者への関わり」は「世界内存在」ということを基盤としているのだと。

つまり、「独立した主観」が最初にあって、対象となる「世界」を認識するのではなく、最初から現存在は世界の「もとにある」存在なのだ。

ハイデガーは、「真理」という現象の基礎には、「認識」ではなく「世界内存在という現象」があるのだと言います。

またここでハイデガーは、気になる表現をしています。

- ・「真理」が与えられているのは、現存在が存在しているかぎりだけであり、またそのあいだだけである

- ・存在者は、総じて現存在が存在しているときだけ暴露されており、またそのあいだだけ開示されている

ここでハイデガーは「ニュートンの法則」を例にあげます。

ニュートンの法則で有名なのは「重力の法則」ですね。

リンゴの木からリンゴが落ちるのを見て思いついたと言われているあの有名な法則です。

ニュートンがそれを「法則」として発見する前から、リンゴは木から落ちていたわけです。

でも、ニュートンが発見する前にはそれは「真でも偽でもなかった」のだとハイデガーは言います。

- ・それらの諸法則はニュートンによって真となったのであり、それらの諸法則とともに存在者が、現存在にとってその存在者自身に即して近づきうるものとなった

- ・存在者が暴露されていることでもってその存在者は、まさしく以前にもすでに存在していた存在者として、おのれを示すのである

- ・すべての真理は、現存在に適合した本質上の存在様式に応じて、現存在の存在との相対関係にある

ここでもハイデガーはやはり「現存在中心主義」をとっていることがわかりますね。

さらにハイデガーは気になる表現をしています。

- ・真理は現存在の開示性として存在せざるをえない

真理という現象の基礎に世界内存在という現象があるのであれば、「真理が暴露される」ことは「現存在が暴露される」ことに他ならない、つまりそれは「現存在の開示性」ということである、ということでしょうか。

今回の第6章で、現存在の特徴としての「気遣い」と、その「気遣い」と「（現存在以外の）存在者」との関わりが明らかにされました。

第6章の最後、つまりは第1篇の最後で、ハイデガーは以下のような問いをあげます。

Q. しかし、気遣いという現象でもって、現存在の最も根源的な実存論的・存在論的機構が開示されて存在しているのであろうか

Q. 気遣いという現象のうちにひそんでいる構造上の多様性は、現事実的な現存在の存在の最も根源的な全体性を与えるのであろうか

Q. これまでの根本的探究は、そもそも現存在を全体として眼差しのうちへと取り入れていたのであろうか

これらの問いに関する探究が、第2篇で展開されていくことになります。

いや～、ここまで偶数回として9回、なんとか続けてきてようやく『存在と時間』の半分が終わりました～。

奇数回を挟むので隔週とはいえ、毎回100ページ近い本文を読み、それについてのレジユメを作成し、30分で報告し、その内容について哲学学校の参加者と1時間ディスカッションし、その後に報告としてホームページにアップする。

「万年3日坊主」の土畠にとっては、とても大きな成果です。

最初は「自分の勉強のためだから、1人でも参加してくれれば続けよう」なんて思っていたのですが、毎回5～10名の方が参加してくださり、リアルタイムでオンラインに参加できなくても「毎回録画観てます！」と言ってくれる方がけっこういらっしゃいます。

これまで付き合ってくれた皆さんに感謝です。

当初は大学の講義と同じスタイルで、全15回で読み切ろうと思っていましたが、ムリ！ハイデガーだっていつも最後までやれてなかったんだから、ドバデガーにはムリ！

ということで、前半を9回でやったということで、切りのいいところで全20回くらいでやり切れたらいいかなーと気楽に考えることにします。

第20回 第2篇第1章「死」前半

2020年9月24日（木） 13:30～15:00で、第20回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回から第1部の第2篇に入ります。公刊部の後半です。

今回は、第1章「現存在の可能的な全体存在と、死へとかかわる存在」の前半を扱いました。

第1篇では、人間を「現存在」と定義し、以下のように分析してきました。

- ・ 現存在という存在者の根本機構 = 世界内存在
- ・ 世界内存在の諸構造の中心 = 開示性
- ・ 現存在の本質 = 実存
- ・ 現存在は了解しつつ存在しうることとして存在している
- ・ おのれの存在においてこの存在自身へとかかわりゆくことが問題
- ・ 実存は現存在の現事実性および頹落と等根源的に連関している

第1篇では、現存在の「日常性」に主な焦点をあてて分析してきました。

しかしながら、現存在の「日常性」というのは、「現存在の非本来的な存在でしかない」と言います。

「現存在の存在の学的解釈」を十分に行うには、現存在の「本来性」と「全体性」を実存論的に明らかにしなければいけません。

とくに「全体性」については、現存在の「終わり」、つまり「死」について分析する必要があるとハイデガーは言います。

まず最初に、この「死」というものについて考える方法として、「他者たちの死」によって死の経験を獲得できるだろうか、とハイデガーは考えます。

しかしながら私たちは、「他者の死」を経験しても、「自らの死」を経験したことにはなりません。

たとえ大切な家族が亡くなるという「喪失」を経験したとしても、それは自らの死とは異なるということです。

「死」というものは「自分固有のもの」なので、「他者によって代わってもらう」ことはできない、「代理不可能性」という特徴をもつものだと言います。

それでは、現存在の「死」をどのように分析することができるのでしょうか。

「死」については、

- ・終焉する
- ・落命する
- ・死亡する

という三つのあり方があると言います。

「落命する」というのは動物の死のあり方です。

現存在は「死亡」します。

「死亡する」とは、「現存在がおのれの死へとかかわりつつ存在しているときの存在の仕方」であると言います。

これについて分析する際、「存在的・彼岸的な思弁」に陥ってはいけないとハイデガーは注意します。つまり、「死んだあととは体はどうなるのか」「死後はどこに行くのか」「死はなぜ訪れるのか」「死亡する意味は何なのか」といったような、生物学、心理学、弁論論、進学的な議論に陥ってはいけないと言うのです。

ハイデガーは、「死の実存論的分析は容易ではない」と言います。

「偶然的に勝手気ままに捏造された死の理念を頼りとすることはできない」というのです。

ここでハイデガーは、興味深い表現をしています。

- ・死へとかかわる存在の実存的な諸可能性が共に鳴り響いている
- ・死の分析においては、現存在がもっている可能性という性格が最も先鋭に露呈してくる

ハイデガーは、「死」を「可能性」と結び付けているのです。

次回の第1章後半では、本格的に「死」についての存在論的分析が行われます。

ディスカッションでは、「今回は面白かった」「わかりやすかった」という意見が数名から聞かれました。

参加者からは

- ・死は段階的に近づいてくるものだとして理解していた
- ・「生まれる」のときにすでに「死ぬ」という要素が入っているという部分を読んで、「生きる」と「死ぬ」ということが平行線にあるということなのかもしれないと思った
- ・ハイデガーは「誕生」についてどのように考えていたのか興味がある
- ・ドラマ『北の国から』の最終話「遺言」を思い出した
- ・アニメ映画『リメンバー・ミー』を思い出した

・若くして亡くなった自分の父のことを思い出した。亡くなったあとのほうがむしろ父の存在を近くに感じるようになった

という意見がありました。

また、ハイデガーの分析方法について

・ハイデガーは「主体」や「個人」といった概念を批判していたのではなかったか。「死の代理不可能性」という考えにおいては、それらが前提とされているのではないか

・「死にかかわる」というのは、「死について意識的である」ということなのか。ハイデガーは「認識する」ということを批判していたのではなかったか

といった批判も出されました。

みらいつくり研究所では、絵本・映画・新聞記事などをもとに「終末期／エンドオブライフ」について対話する「ナラティブセッション」や、カードを引いてそこに書かれているテーマにそって自由に「死」について語る「Cafeです。」といった活動もオンラインで行っています。

みらいつくり研究所に併設する医療法人稲生会では、2016年頃から「死や喪失について語る場をつくる」ということを重視しています。

これらの活動においても、今回の「死」についての分析は色々な示唆があるな一と思いました。

次回、さらに「死」についての思索を深められるのが楽しみです。

第22回 第2篇第1章「死」後半

2020年10月6日（火） 13:30～15:00で、第22回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

前回から第1部の第2篇に入りました。公刊部の後半です。

今回は、第1章「現存在の可能的な全体存在と、死へとかかわる存在」の後半を扱いました。

前回に引き続き、「死」の分析が続きます。

ハイデガーはここで、「死の5つの特徴」を上げます。

①固有性

- ・死は現存在自身が引き受けなければならない一つの存在可能性である
- ・死とともに現存在自身は、おのれの最も固有な存在しうることにおいて、おのれに切迫している
- ・この可能性において現存在は、世界内存在そのものへとかかわりゆく

②没交渉性

- ・おのれに切迫しているときには、現存在においては他の現存在とのすべての交渉は絶たれている
- ・この最も没交渉的な可能性は同時に最も極端な可能性である

③追い越しえない

- ・現存在は、死の可能性を追い越すことはできない
- ・死は、現存在であることの絶対的な不可能性という可能性である

④確実性

- ・死は確実にやってくる

⑤無既定性

- ・死がいつやってくるかはわからない

現存在は、こういった特徴をもつおのれの「死」に「委ねられている」と言います。

この「死」は、「世界内存在に属している」とも言います。

また、「現存在が実存するときには、現存在はいちはやくこの（死の）可能性のうちへと被投されている」とも言います。

こういう状況が切実にあらわれるのは、「不安」という情状性においてだ、とハイデガーは言います。

現存在が「不安」という情状性をもつのは、「現存在がおのれの終わりへとかかわる被投的な存在として実存していることの開示性」だとも言っています。

しかしながら平均的日常性において現存在は、「ひと（世人）」として、「死へとかかわる固有な存在に直面するという居心地の悪い不気味さから逃避している」と言います。

「ひと」は、死を「死亡事件」として捉えます。

身近な人たち、疎遠な人たち、見知らぬ人たちが「日々刻々と死亡」している。

「ひとは結局いつかは死亡するものだが、差しあたっては自分自身には関係がない」として捉えます。

現存在のこの「死を隠蔽しつつ回避する」という特徴は、「日常性をきわめて執拗に支配している」と言い、「最も身近な人たちが「死亡しつつる」場合においても、

「おまえは死をまぬがれて、おまえが配慮的に気遣う世界の安らかな日常性のうちへと、まもなくふたたびもどれるであろう」

と自分自身に言い聞かせるほどだと言います。

また、「死のことを考えることからしてすでに、公共的には、臆病な恐れ、現存在の不確かさ、陰気な世界逃避だとみなされ」、「世人は、死に対する不安への気力が起こらないようにさせる」とも言います。

では、このような「死」に、「本来的にかかわる」ということはどういうことなのでしょう。

それは、「死」を「可能性」としてとらえ、その可能性へと「先駆する」ということだと言います。

それに対して、「死を現実化させる」ことは、死への本来的な関わり方ではないと言います。

「死の現実化」とは、「死に関して思い悩むこと」「死が来ることを期待すること」「計算ずくで死を思いのままにしようとすること」です。

それは、「死の可能性を弱める」ことになるからだと言います。

先に述べた「死の5つの特徴」それぞれについて、「死への本来的な関わり方」つまり「死への先駆」は、以下のように関係していると言います。

①固有性

- ・死の可能性へとかかわることによって、現存在自身の「最も固有な存在しうること」を開示する

- ・現存在は、死へと先駆しつつおのれをそのつどすでに世人から引き離しうる

②没交渉性

- ・死は、現存在を単独の現存在として要求する

- ・先駆において了解された死の没交渉性は、現存在を現存在自身へと単独化する

③追い越しえない

- ・おのれ自身を放棄することが、実存の最も極端な可能性として現存在に切迫している

- ・死の追い越し不可能性に向かって自由におのれを解放する

- ・おのれに固有な死に向かって先駆しつつ自由になることが、偶然的に押し寄せてくる諸可能性のなかへの喪失から解放してくれる

- ・しかもこのことこそが、追い越しえない可能性の手前にひろがっている現事実的な諸可能性をまずもって本来的に了解させ選択させる

- ・先駆は、最も極端な可能性として、実存に自己放棄を開示し、かくして、そのつど達成された実存に固執することを、どれもこれも打ち砕く

- ・終わりのほうから規定された、言いかえれば、有限的なものとして了解された、最も固有な諸可能性に向かって自由になる

「諸可能性」といっても、色々な「諸可能性」があるということなんですね。紛らわしいです。

「単独化」とは、文字通り「独りになる」ということなんですが、ここでハイデガーは「共存在」という現存在の特徴および「他者たち」について下記のように書いています。

- ・没交渉的な可能性として死が単独化するのも、ただ、追い越しえない可能性としての死が、共存在としての現存在に他者たちの存在しうることを了解させるためなのである

- ・追い越しえない可能性のうちへの先駆は、この可能性の手前にひろがっているすべての諸可能性をも共に開示するゆえ、その先駆のうちには、全体的現存在を実存的に先取る可能性が、言いかえれば、全体的な存在しうることとして実存する可能性が、ひそんでいる

本当の意味で死に独りで向き合うことを通して、「自分は他者とともに存在しているのだ」ということがわかり、自分の人生に色んな可能性があるということがわかることで、「全体的現存在」になれる、ということなんじゃないかな。

④确实性

- ・現存在は、死が確実だということを通して、自らが世界内存在だということをとる
- ・死を真とみなして保持することは、現存在をその実存の完全な本来性において要求する

⑤無規定性

- ・死がいつやってくるかわからないことで、現存在は不安になる
- ・死へとかわる存在は、本質上、不安なのである

以上の分析から、現存在が死へと本来的にかかわる「先駆」ということを、ハイデガーは以下のようにまとめます。

先駆は、現存在に世人自己のうちへの喪失を露呈してみせ、現存在を、配慮的に気遣いつつある顧慮的な気遣いに第一次的には頼ることなく、おのれ自身でありうる可能性に当面させるのだが、そのおのれ自身とは、情熱的な、世人の錯覚から解放されている、現事実的な、それ自身を確実だととっている、不安がりつつあるような、そのような死への自由におけるおのれ自身なのである

では、どういうときに「死へと先駆している」ということが明らかになるのか。何があれば現存在は「本来的に実存している」と言えるのか。

ハイデガーはそれを「証し」と言います。そして、以下のように書いて次の第2章へとつなぎます。

「これまではただその存在論的可能性において企投されてきたにすぎない死への先駆は、証しを与えられた本来的な存在しうることと、はたして本質上連関づけられるのかどうかという問題が起こってくる」

ディスカッションでは、以下のような意見が出ました。

- ・かつてはもう少し死が身近にあったのではないか
- ・少し前に死ぬかもしれないという経験をしたが、それが遠ざかるにつれて、その時の恐怖という不安をできるだけ隠そうとしてしまう。もうそこには関わりたくない、あらためてそこに向き合って思い返すみたいなことはしたくな、とってしまう。その意味で、自分は立派な「世人」だと思った
- ・「死の現実化」というのが何を意味しているのかわからなかったが、「自殺」のことだと聞いてなるほどと思った
- ・以前に東日本大震災の津波で大きな被害を受けた地域に仕事で関わっていた。コミュニティのスタンスとして「死」がものすごく近くにあった。たまたま震災の1週間前にコミュニティで避難訓練をしていた。その時に避難した場所で、「こんなところだったら大きな津波きたらみんな死んじゃうよね。丘の上にできた中学校に避難しないとだめだよ」とみんなで話していた。1週間後に地震が起きた時、みな一目散に丘の上の中学校に避難して全員助かった

- ・子どものころに阪神大震災を経験した。その後、狭いところや暗いところが怖くなった。その後、がんを経験した。それから10年以上経って記憶は薄れつつあるが、「死」について考えるのは怖くなくなった

- ・「自分の人生をどうたたむか」を真剣に考えないといけないと思った

第24回 第2篇第2章「証しと決意性」前半

2020年10月20日（火） 15:30～17:00で、第24回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は、第2篇第2章「本来的な存在しうることの現在性にふさわしい証しと、決意性」の前半を扱いました。

第2篇は、「本来的な存在しうること」について分析されています。

第1章では、「死への先駆」というのがその本来的な存在しうることのひとつだとされました。

とはいえ、実際に「死」に至ると、現存在は無くなってしまいます。

では、どんな要素があると、現存在は「本来的に存在している」と言えるのでしょうか。

その要素をハイデガーは「証し」と名付けます。

そしてその「証し」というのは、「良心の声」と言えます。

この「良心」の中身に注意が必要です。

普通の意味で「良心」というと、道徳的な意味が含まれますが、ハイデガーはそれを全く含めません。

以下、ハイデガーによる「良心」の説明です。

良心

- ・「何ものか」を了解するようほのめかす = 良心は開示する
 - ・良心は呼び声である = 呼ぶことは語りの一つの様態である
 - ・良心の呼び声は、現存在の最も固有な自己存在しうることをめがけて、現存在に呼びかけるといふ性格をもっている
 - ・最も固有な責めある存在へと呼びさますという仕方においてなのである
 - ・良心の呼び声には、或る可能的な聞くことが対応している
 - ・呼びかけの了解は、良心をもとうと意志することとして露呈する
- ⇒ 良心をもとうと意志することというこの現象のうちに、自己存在というものの選択を実存的に選択するという求められていた当のものがひそんでいる
- ⇒ これをわれわれはその実存論的構造に応じて決意性と名づける

現存在は、世界的なものに配慮し、世界的なものから自分を理解するという、「頹落」の状態にある「世人」だとハイデガーは言いました。

この世人というありかたにおいては、「空談」（おしゃべり）や「曖昧性」の騒音に耳を傾けてしまっていると言います。

そのような状態から、本来的な状態へと、「良心」が現存在を「呼び戻す」というのです。

どのような状態に呼び戻すかというと、

「最も固有な諸可能性のなかへと」呼び進めるのだと言います。

「呼び声」とは言いますが、「どうてい言葉にはなりえない」とも言います。

良心が語るのは、「沈黙」や「黙秘」においてだと言うのです。

おいおいまたかよハイデガー、って感じですよ。

呼びかけられているのは誰かという、もちろん現存在です。

では、呼びかけている者は何かという、それも現存在だとハイデガーは言うのです。

「自分で自分に呼びかけるってどういうこと？」と思ってしまうのですが、ハイデガーの考えでは「現存在 = 自分」ではないことにご注意ください。

このあたり、「現存在」の捉え方がなかなか難しいですよ…。

現存在の「良心の声」によって現存在は呼び戻される。

そのときに現存在は「世界の無」の前に置き据えられると言います。

そしてそれによって、現存在は「不安」に至ります。

この辺は、第1章の「死に向き合うときに不安に至る」というのと同じですね。

では、現存在はこの「良心の呼び声」を、どのように「聞くこと」ができるのか。

「良心の呼び声」を理解すると、現存在はどうなるのか。

後半部分を取って言うと、現存在は「責めある存在」になると言います。

また新しい概念出してきた…って感じですね。

詳細は次回を待ちましょう。

今回は該当部分がやや短かったこともあり、ディスカッションの時間が多くとれました。

「良心の呼び声」って聞いたことある？ってところから議論が始まりました。

「小さいときにずっと聞いていた」という人もいれば、「もしかしたらあれがそうだったのかな」という人も。

ある障害当事者は、健常者がよく言う「社会の歯車」にむしろ自分もなりたい、そう言いました。

でも、日々の生活の中で、理不尽なことを見聞きする中で、「これは何かおかしい」と思うようになったと言います。

「なんで？」という思いが、自分を今の場所にまで連れてきたのだと言いました。

その「何かおかしい」や「なんで？」も、もしかしたら「良心の呼び声」なのかもね、という意見も出ました。

あとは、良心の呼び声によって「最も固有な諸可能性」の前に呼び戻されると言うけど、この「諸可能性」ってどういうことだろうね、という話にもなりました。ハイデガーの言う、「選択することを実存的に選択する」ってどういうことなのかなーと、皆それぞれの立場で意見を出し合いました。本来的な選択肢と、非本来的な選択肢がそれぞれ複数ある、「本来的な選択肢から選択することを決意する」ということなのかな？という意見も出ましたが、それがたとえ「非本来的な選択肢」だと思っていたものでも、「固有な存在である」ことを目指して選択した時は、それも「本来的な選択肢」になるのでは？という意見も出ました。

また、毎回松井君が出してくれる「やっぱり個人を想定してる？個人の意識っていうものがどうしても前提されてない？」という疑問については、「現存在＝個人」じゃないんだらうね、という意見が出たり、そもそも現存在が他の共現存在と「共存在」してるんだから、「個人だけの話」じゃないんだらうね、っていう意見も出ました。

このあたり、「決意性」がどんな風に他の共現存在に影響を及ぼすのか、次回の後半部分の内容に期待したいところです。

また、「責め」とは何なのか…。「責任」ということなのか…。それは「自由」と関係しているのか…。

そんなことのヒントも次回以降で出てきたらいいなーと思います。

第26回 第2篇第2章「証しと決意性」後半

2020年11月5日（木） 10:30～12:00で、第26回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は、第2篇第2章「本来的な存在しうることの現在性にふさわしい証しと、決意性」の後半を扱いました。

前回の前半部分で、「良心の呼びかけ」と「責め」というキーワードが出てきました。

良心は「世人自己に呼びかける」といい、「最も固有な自己をその存在しうることへと呼びさます」と言います。

良心の呼びかけによって現存在は「単独化された存在しうること」という状態になるが、それは現存在にとって「不気味」なものだと言います。

もうひとつの「責め」については、良心の呼びかけによって現存在は「責めある存在」になるというのですが、この「責めあり」という理念のうちには、「非という性格」が潜んでいるといます。

この「責めあり」の「非という性格」は、「非力さ」とも表現されます。

「非力さ」というと、なんとなくマイナスなイメージを持ててしまいましたが、ハイデガーはこの非力さについて下記のように述べています。

- ・ 現存在がおのれの実存的な諸可能性に向かって自由であることに属している
- ・ 自由は、特定の一つの可能性を選択することのなかにのみ、存在しており、言い換えれば、その他の諸可能性を選択しなかったということに、またその他の諸可能性をも選択しえないということに耐えることのなかにのみ、存在している

そして、「実存論的非力さ」について、「現存在という存在者の存在は、この存在者を企投することができ、またたいていの場合達成するすべてのものに先立って、企投することとしてすでに、非力なのである」と言います。

少し戻って、「良心の呼びかけを正しく聞く」ということはどういうことなのかについてですが、それは

良心をもととうと意志すること

であると言います。

なんだか、循環論法のように聞こえてきますね…。

ハイデガーは別の表現で

良心をもととうと意志すること = 不安を受け入れようと用意すること

とも言っています。

世界内存在としての現存在の本来的な情状性（気分）は「不安」でしたから、この本来的な情状性を受け入れるということがすなわき「良心をもとうと意志すること」というのは、ちょっとわかったような、わからないような、という感じですね。

また、「良心をもとうと意志すること」のうちにひそんでいる現存在の開示性として、

①不安という情状性

②最も固有な責めある存在をめがける自己企投としての了解

③黙秘としての語り

の3つをあげていますが、これらの本来的な開示性のことを「決意性」と表現していません。

まとめると

最も固有な責めある存在をめがけて、黙秘したまま不安への用意をととのえて、おのれを企投すること

ということになります。

ハイデガーによると、この決意性が

「世界」の被暴露性と、他者たちの共現存在の開示性とを、等根源的に変様させる

と言います。

そして、

決意性は、自己を、まさしく道具的存在者のもとでのそのときどきの配慮的に気遣いつつある存在のなかへと引き入れ、また自己を、他者たちと共なる顧慮的に気遣いつつある共存在のなかへと押しやるのである

と言います。

また、決意した現存在について、

・おのれの世界に向かっておのれを開放する

⇒ 共存在しつつある他者たちを、彼らの最も固有な存在しうることにおいて「存在」せしめ、この彼らの存在しうることを、手本を示し解放する顧慮的な気遣いのうちで共に開示するという可能性へと、現存在を連れ込む

・他者たちの「良心」となることがありうる

・決意性の本来的な自己存在のうちから、本来的な相互共存在がはじめて発現する

・しかしけっしてそれは、世人と、ひとが企てようとする当のこととにおいて、曖昧で嫉妬深い協定やお喋りな親睦から発現するのではない

とも言っています。

このように、「決意した現存在」を実存論的に規定するものを、ハイデガーは状況と名付けます。

ハイデガーが状況について書いていることを列記します。

状況（何かをなしうる情勢）

- ・或る空間的な意義がいっしょに響きわたっている
- ・その空間的な意義は現存在の「現」のうちにもひそんでいる
- ・世界内存在には或る固有の空間性が属しているのであって、この空間性は、遠ざかりの奪取および方向の切り開きという現象によって性格づけられていた
- ・現存在は、現存在が現事実的に実存しているかぎり、「空間を許容する」
- ・実存は、現存在にふさわしい空間性を根拠として、おのれにそのつどおのれの「在りか」を規定する
- ・現存在にふさわしい空間性は、世界内存在という機構のうちにもその根拠をもっている
- ・この機構の第一次的構成要素 = 開示性
- ・現の空間性が開示性のうちにその根拠をもっているのと同様に、状況はおのれの基礎を決意性のうちにもっている
- ・状況とは、そのつど決意性のうちで開示された現のこと
- ・状況とは、出会うさまざな事情や偶然から成る事物的に存在する混合物というようなものとはおよそかけ離れて、決意性によってのみ、また決意性のうちでのみ存在する
- ・自己は実存しつつ現として存在せざるをえないのであり、そうした現に向かって決意していればこそ、諸事情のそのときどきの現事実的な適所性という性格がはじめて自己に開示される
- ・決意性により、われわれが偶然と呼んでいるものが、共世界や環境世界からふりかかってくることができる

うまくまとめられないので列記しちゃいました…。

そして

- ・現の存在を、この現の状況の実存のうちへともたらず
- ・良心の呼び声は、状況のなかへと呼び進める

とも言います。

そしてさらに

・気遣いのうちで気遣われ、気遣いとして可能であるような、この気遣い自身のそのような本来性にほかならない

とも言います（どういうこと（笑））。

ハイデガー曰く、第2篇第1章と第2章で

「目下の根本的探究は、現存在の本来的な全体存在しうるということと求められていたものの、存在論的意味を、限界づけることができる段階にいたった」

とのこと。

でも、

「現存在の本来性 = 死へとかかわる本来的存在は、本来的な全体存在しうることでして実存論的に演繹されはしたものの、依然として、現存在にふさわしい証しを欠いている純粋に実存論的な企投にとどまっている」

「この現存在にふさわしい証しが見いだされたときにはじめて、目下の根本的探究は、現存在の実存論的に確証され明瞭化された本来的な全体存在しうるあり方の提示という、みずからの問題性において要求されていた課題を、満足させる」

「現存在というこの存在者がその本来性と全体性において現象的に近づきうるようになったときのみ、存在了解一般がその実存に属しているこの存在者の存在の意味への問いが、吟味に耐えうる地盤のうえに置かれる」

とのことです。

そして、これまで本格的には言及していなかった、本のタイトルの半分になっている「時間」についての考察が、次の第2篇第3章から始まることとなります。

今回で第2分冊（中公クラシックス）は終了！

第3分冊は、すべて「時間」についての分析になります。

といっても、第3分冊まででも、全体構想の半分もいってないんですけどね…。

第1篇第3章「世界の世界性」のところでもそうでしたが、なんか「空間性」が出てくると、途端に難しくなる…。

第28回 第2篇第3章「気遣いの存在論的な意味としての時間性」

2020年11月19日（木） 10:30～12:00で、第28回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は、第2篇第3章「現存在の本来的な全体存在しうることと、気遣いの存在論的な意味としての時間性」を扱いました。

今回からいよいよ最後の第3分冊に入りましたが、ここにきてようやく『存在と時間』のタイトルにも入っている「時間」の議論が始まります。

といっても、本格的な「時間」の議論が始まるのは、次回の第2篇第4章から…。 「時間」について深く分析していく前の、準備段階として「現存在の本来性」「現存在の全体性」「気遣い」といった存在論的概念について振り返っておきましょう、といった感じの内容です。

前回の第2篇第2章において、「先駆的決意性」という概念が出てきました。これは、この「先駆的決意性」によって、現存在は「本来的な全体存在」になれるのだということでした。この「先駆的決意性」という現象に即して、「時間性」というものが「経験される」とハイデガーは言います。

ハイデガーは、「時間は存在しない」と言います。

その代わりに、

「時間性は、さまざまな可能性において、また様々な仕方において時熟することができる」

と言います。

私たちは普段、「時間があまりない」とか「時間はまだたっぷりある」とか言いますよね。あたかも、「時間」というものを「存在者」のようにとらえています。ハイデガーによるとそれは「通俗的な時間概念」だとされます。

「通俗的な時間概念」においては、

過去 → 現在 → 未来

といった「単線的で一方向的な時間の流れ」が想定されます。

これに「人間の一生」をあてはめると、

（誕生） → 過去 → 現在 → 未来 → （死）

となるわけですが、ハイデガーによればこれも「通俗的な捉え方」ということになるわけですね。

つまり、「死は未来のどこかでやってくるもの」であり、「今ではない」というふうに考えるのが「世人（ひと）」のあり方なのである、ということでした。

そうではなく「本来的に死のことを考える」、それは前章では「良心をもとうと意志すること」とされたわけですが、それによってはじめて現存在は「本来的で全体的な存在」になれるのだとされました。

時間についても、このように「本来的な捉え方」をしなければならないということなんですね。

このまま「本来的な時間概念」の分析に入っていくと思いきや、第64節では突如として「気遣いと自己性」ということについて考察し始めます。

この考察の中で再び、「主観性」というものが俎上にあげられ、またもカントやデカルトが批判されるのですが、その長いこと…。正直、なぜこの章のこの部分で「自己性」について考える必要があったのか、あまりよくわかりませんでした。

次の第65節になって、「気遣いの存在論的意味としての時間性」というものが考察されます。

ここで「到来」というハイデガー独自の術語が出てきます。訳書によっては「将来」と訳されているものもあります。

また「既在」という術語も出てきます。

さらに「現成化」という術語も出てきます（訳書によっては「現在化」）。

ここで注意なのは、非本来的な「過去」「現在」「未来」に対して、それぞれ本来的なものが「既在」「現成化」「到来」ではないということです。

時間というものを実存論的にとらえる上で必要な術語が「既在」「現成化」「到来」だといったほうがよいかと思えます。

それぞれの意味は

- おのれに先んじて ⇒ 到来 にもとづく
- 何かの内ですでに存在している ⇒ それ自身において既在性を表明している
- 何かのもとでの存在 ⇒ 現成化することのうちで可能化される

とされます。

ハイデガーの時間概念の特徴は、上記の3つの術語の中で「到来」というものに優位がおかれているということです。

これら3つの術語は、以下のように「時間性を脱自としてあらわにする」という現象的性格をもつと言います。

- 到来 ⇒ 「おのれへと向かって」

●既在性 ⇒ 「のほうへともどって」

●現在 ⇒ 「を出会わせる」

本章でもう一つ出てくる術語は「瞬視」です。

これは、「現在」を本来的にとらえたものとされます。

このような「到来」を優位とする時間性には、「おのれへと向かって到来することの有限性」があると言います。

この「有限性」とは、「非力さ」とも表現されます。

現存在の「到来」については、常に「死」という「非力さ」がある。それが「有限性」である、ということですね。

第65節の最後でハイデガーは、自らの「根源的な時間性の分析」における5つのテーゼ（仮説）を示します。

- ①時間は根源的には時間性の時熟としてある
- ②そのような時熟として時間は気遣いの構造の構成を可能化する
- ③時間性は本質上脱自的である
- ④時間性は根源的に到来から時熟する
- ⑤根源的時間は有限的である

第66節では、続く第4～6章で「時間」の分析がどのようになされるのかということを示します。

第4章 日常性と時間性

第5章 歴史性と時間性

第6章 時間内部性と時間性

今回のディスカッションでは

「ついに『時間性』に関する議論が始まって、ものすごく面白く読めた！」

という声が2名の参加者からあがっていました。

その他には

「自分たちが普段考える『時間』の概念が、ハイデガーの言う時間の議論をわかりにくくさせてしまっている」

「『みらいつくり』というのは、『未来』をつくるということだから、すごい通俗的なものをつくってるってことになっちゃう？（笑）」

「『既在』というのは、『過去を振り返る』ということとは違う？」

と言った声が出ました。

また、「みらいつくり大学」の他の講座との関連で、最近「みらいつくり映画同好会」の課題作となった映画『インターステラー』について言及する参加者がたくさんいました。

『インターステラー』では、相対性理論にもとづいた「時間のズレ」が重要なテーマになっています。また、同じクリストファー・ノーラン監督による最新作『TENET』では、「時間の逆回し」が重要なテーマになっていて、そのことについても言及されました。

今回のように、他の活動ともリンクしてくるのが、みらいつくり大学の面白いところです。

第30回 第2篇第4章「時間性と日常性」(前半)

2020年12月1日(火) 10:30~12:00で、第30回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は、第2篇第4章「時間性と日常性」の前半部分を扱いました。

ハイデガーはいつも、「さしあたりたいてい」という「日常性」から分析を始めます。

第2篇第4章では、第1篇第5章ですでに分析された「現の開示性」について、「時間性」という観点から、「日常性」という視点で分析を行います。

第1篇第5章Aでは、「現の開示性」の契機として、

- ①了解
- ②情状性(気分)
- ③語り

という3つが挙げられました。

これらの開示性が、「さしあたりたいてい」つまり「日常性」にある状態、その人固有ではなく他の人と変わらないような「世人(せじん)」あるいは「ひと」という状態として、「B. 頹落(たいらく)」というものが挙げられていました。

今回の第2篇第4章 第68節 「開示性一般の時間性」においては、なぜか

- (a) 了解の時間性
- (b) 情状性の時間性
- (c) 頹落の時間性
- (d) 語りの時間性

ということで、「頹落」が「語り」の代わりに入っています。

「語りの時間性」については、あまり深くは分析されていません。

今年(2020年5月)に出版された、第2篇の詳細な注解書(実は他にあまりない。他は第1篇の注解書がほとんど)である須藤訓任『「存在と時間」第2篇評釈 本来性と時間性』においても、「語りの時間性」に関する部分について

「どうも、本節は投げやりのつか、及び腰的になっている気配がある。テーマに本気になっていない。あるいは、本気になったら、その先に拓けてくる問題の重大さに怯えて、蓋をしてしまったとでも言ったらよいのだろうか」(p. 368)

と書かれています。

ということで今回は、上記(a)~(c)についてまとめてみたいと思います。

(a) 了解の時間性

了解というのは、到来（将来）へと自らを企投することでした。

本来的な到来というのは 先駆 と表現されました。

これに対して非本来的な到来とは何だろうか、その時間性とはどのようなものだろうか、というのがここで分析されます。

ハイデガーは非本来的な到来のことを 予期 と呼びます。

予期ってなんとなく、「到来（将来）」からきているような気がしますよね。

でもハイデガーは、予期においては、

「配慮的に気遣われたもののほうから現存在は、おのれへと向かって到来する」のだと言います。

この際現存在は、「ひと」「世人自己」として気遣いをしていると言うのです。

ちなみにここでハイデガーは、「期待」というのも「予期」にもとづいている、つまり「非本来的な到来」だと言っています。

ちなみにハイデガーは、「現在」というものについても本来的なものと非本来的なものを区別します。

本来的な現在のことを 瞬視（瞬間） と呼びます。

この瞬視について

「瞬視は、本来的に現に何かと向き合い現成化するという意味での現在として、道具的存在者や事物的存在者のありさまで『なんらかの時間の内で』存在しうるものを、はじめて出会わせる」

と説明しています。

これに対して非本来的な現在は 現成化（現在化） と呼びます。

この現成化とは、「没瞬視的で非決意的」なものだとされます。

次に、「既在」についてみてみましょう。

本来的な既在については 取返し（反復） と呼んでいます。

この取返し（反復）については

- ・おのれの単独化のうちへと被投された最も固有な自己のほうへと復帰すること
- ・おのれがすでにそれである存在者を、決意しつつ引き受けるということ

と説明しています。

それまでの自分自身を、それそのものとして受け止める、みたいな感じなんですか。

これに対して非本来的な既在は「忘却」と呼ばれます。

この忘却については

- ・配慮的に気遣われたものを現成化しつつそこから汲み取られた諸可能性をめがけて、非本来的におのれを企投すること

- ・忘却という、既在性の一つの固有な「積極的な」脱自態（脱出）は、最も固有な既在に直面して、おのれ自身を閉鎖しつつ、そこから脱走するという性格をもっている

と説明されます。

ここまでのところをまとめると

	本来性	／	非本来性
到来	先駆	／	予期
現在	瞬視	／	現成化
既在	反復	／	忘却

という表になりますね。

（誰かWordpressで表をつくる方法を教えてほしい…）

(b) 情状性の時間性

つぎに、情状性（気分）の時間性です。

ここでは、代表的な情状性のいくつかについてその時間性が分析されます。

まず初めに、情状性の時間性のベースは、「既在性」にあるということをおさえておく必要があります。

前節 (a) 了解の時間性 のベースが「到来」にあったのと異なりますね。

まずは「恐れ」の時間性です。

恐れとは、非本来的な情状性でした。

ハイデガーは、恐れは「予期」であると言います。

そしてまた、恐れの実存論的・時間的意味は「自己忘却」によって構成されていると言います。

恐れは「予期しつつ現成化する一つの忘却」とまとめられます。

「非本来的な時間性」が3つそろった感じですね。

これに対して根本情状性である 不安 の時間性については、

- ・不安は、最も固有な、単独化された被投性の純然たる事実のほうへと連れ返す
- ・不安の現在は、最も固有な被投性のほうへとおのれを連れ戻すことのうちに保持され落ち着いている

と言います。「不安においては落ち着いている」というのも、変な感じですけどね。

このようにハイデガーは、恐れに対して不安を重視するわけですが、といっても、

- ・しかし、不安のこの現在は、必ずしも、決意において時熟する瞬視という性格をもっているわけではない
- ・不安は或る可能的な決意の気分のなかへと連れ込むだけなのである

・不安の現在自身が瞬視として可能であり、また不安の現在のみが瞬視として可能なのだが、そうした不安の現在は、瞬視を、まさに跳躍させようと保持しているのである

と言います。

「不安において現存在は、決意を迫られている（本来的な現在を生きるかどうかを迫られている）」

みたいな感じで理解できるでしょうか。

ハイデガーは不安に特有な時間性を

- ・不安が根源的には既在性にもとづいており、既在性のうちからはじめて到来と現在が時熟するということ

・不安は不気味さによって心を奪い去られているが、現存在を「世界的な」諸可能性から奪い返すだけでなく、同時に現存在に、或る本来的な存在しうることの可能性を与えるのである

・不安の到来と現在は、取り返し可能性のほうへと連れ返すという意味での根源的な既在しつつ存在していることのうちから時熟する

・不安は、「空しい愚劣な」諸可能性から解放し、本来的な可能性に向かって自由に開放させるのである

と説明します。

不安と恐れという情状性を比較して、

・第一次的にはなんらかの既在性にもとづいているとはいえ、気遣いの全体における両者それぞれに固有な時熟に関しては、両者の根源は異なっている

・不安は決意性の到来から発現し、恐れは喪失的な現在から発現し、恐れは、こうした現在を恐ろしげに恐れ、その結果、こうした現在の手に落ちて頹落するにいたる

と述べています。

その他の情状性として 希望 と 無関心 が挙げられます。

「希望」というとなんとなく良いイメージを持ちますが、ハイデガーはあまりそういった捉え方をしません。

光文社古典文庫訳の解説（第7巻 p. 363）によると

「希望は明るい到来を考えることで現存在の心を軽くするのであるが、それはすでに重くされた現存在の気分を軽くする役割を果たすのである。だからこそ逆に「希望という情状性が、既在しつつ存在しているという様態で、心の重荷とかかわりつつけている」と言える」

とのこと。

無関心については

- ・この色あせた気分こそ、最も身近な配慮的な気遣いから生ずる日常的な諸気分における忘却の威力を最も強烈に実証する
- ・その日暮らしは、忘却しつつおのれを被投性に引き渡すことにもとづいており、非本来的な既在性という脱自的意味をもっているのである
- ・大あわての多忙さと両立しうるような無関心は、落ち着いた気分からは峻別されなければならない

だと説明しています。

(c) 頹落の時間性

そして最後に「頹落」の時間性ですが、これのベースは「現在」にあると言います。

第1篇第5章Bにおける分析で、頹落には ①空談 ②好奇心 ③曖昧性 というものがあり、それぞれが「語り」「情状性」「了解」に関係していたのですが、本節ではなぜか②好奇心（つまり情状性に関係）についてのみ分析がなされます。

この辺の分析の恣意性が、うーん…となってしまふところですね。

情状性の時間性については、前節 (b) でやったはずですからね。その情状性が「頹落」した状態にあるところの「好奇心」について (c) 頹落の時間性 という本節で分析しますよ、ということですからね。

このあたりは、前述の須藤訓任さんによる評釈書で「無差別性と差別性」という用語で詳細に分析されています。

本来性か非本来性かが決まっていないうのが 無差別性

本来性あるいは非本来性のどちらかというのが決まっているのが 差別性

としてそこでは整理されています。

須藤さんによれば、現の開示性の契機としての A. ①了解 ②情状性 ③語り というのは 無差別性 であり、

B. 頹落 ①空談（語りに関係） ②好奇心（情状性に関係） ③曖昧性（了解に関係） というのは 差別性 であるのだが、

本68節における分析はこれがごちゃごちゃになっている、ということですね。

まあ、それは置いておいて、ここではハイデガーの言うとおりに、「好奇心」の時間性の分析について見てみましょう。

好奇心の時間性について

・好奇心は、事物的存在者のもとに滞留しつつ、それを了解するために、その事物的存在者を現成化するのではなく、むしろ好奇心は、たんに見てとり、そして見おえてしまうためにのみ、見ようと努めるのである

・現成化することとして好奇心は、それに対応した到来と既在性との或る脱自的統一のうちにおかれている

・好奇心は、徹頭徹尾、非本来的に到來的

・好奇心が可能性というものを予期しておらず、すでに可能性をただ現実的なものとしてだけおのれの渴望のうちで熱望するというように非本来的に到來的なのである

・好奇心は、保持を欠いていらだっている現成化することによって構成されている

・この現成化は、予期することから不断に逃走しようと努めるにもかかわらず、保持を欠いていらだちつつ「保持されて」いる

・現在は、それに帰属している予期から、逃走という強調された意味において「発現しつつ飛び去る」

・予期は、いわばおのれ自身を破棄する

・予期することが、発現しつつ飛び去る現成化することによって、追跡しつつ跳んでゆく予期へと脱自的に変様するということが、気散じの可能性の実存論的・時間的な条件

・追跡しつつ跳んでゆく予期によって、現成化することは、ますます現成化すること自身にまかされる

・現成化することは、現在という目的のために現成化するのである

・気の散った無滞留は滞在するところを失ってしまう（現存在は、いたるところに存在しているとともにどこにも存在していない）

⇒ この様態は瞬視（実存を状況のなかへと連れこみ、本来的な「現」を開示する）に対する最も極端な反対現象

ちょっと引用が長くなりましたが、要するに「好奇心」とは、「瞬視」の正反対の状態ということですね。

頽落というのは、「世界」に投げ込まれている＝「世界におのれを喪失している」状態なのですが、これについてハイデガーは以下のように書いています。

- ・「世界」におのれを喪失し、共に連れ去られてゆくということの実存論的意味をなしている現在は、それ自身からは、けっして現在以外のなんらかの脱自的地平を獲得することはない

- ・もしも獲得することがあるとすれば、この現在が、決意においておのれの喪失性から連れもどされ、保持された瞬視としてそのときどきの状況を開示し、死へとかかわる存在という根源的な「限界状況」をもそれと一緒に開示するにいたるときだけである

「保持」は本来の既在である「取返し（反復）」と同じようなものだと考えてよいので、

「決意」「保持」「瞬視」と、本来の「到来」「既在」「現在」がそろった上で、「死へとかかわる」という「全体性」が確保されたときに初めて、「脱自的地平」というものが獲得されるということなんですね。

今回のディスカッションでは、以下のような話題が出ました。

- ・ハイデガーは本来性のことを固有性として捉えているが、自分の固有性というのは生まれながらに決まっていて、それは変えられないのか？逆に、非本来的な生き方をしていたとして、そこから得られるものはないのだろうか？

- ・ハイデガーのいう既在とは、「過去」ではなく、「過去の自分とどう向き合うか」ということなのではないだろうか。

- ・過去をどう捉えるかというとき、「金太郎飴」みたいに、どこを切っても「同じ自分」が出てくるということではないんだろうと思う。生きていくうちに、色や素材がだんだん変わっているはず。

- ・アインシュタインの時代は、「時間」というものを食パンにたとえていたと聞いたことがある。金太郎飴と似た例え？

今回から「時間性」の分析が本格的に始まったわけですが、ハイデガーの分析の進め方が複雑になっている（というよりおかしい進め方になっている？）ということもあり、なかなか理解が難しい部分ではありましたが、第3分冊に入って、レギュラーメンバーの中では「ハイデガーの考え方」「ハイデガーの分析の進め方」の特徴がだいぶわかってきたような感じがあります。

第32回 第2篇第4章「時間性と日常性」(後半)

かなり前になってしまいましたが、2020年12月15日(火) 10:30~12:00で、第32回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は、第2篇第4章「時間性と日常性」の後半部分を扱いました。

本章の前半部分でハイデガーは、時間性として到来、既在性、現在をあげました。

これらの時間性は「脱自性」という性質をもち、それによって現というものが「明るくされている」といいます。

後半部分の最初、第69節「世界内存在の時間性と、世界の超越の問題」においてハイデガーは、世界というものを時間的に分析していきます。

(a) 配視的な配慮的気遣いの時間性

現存在が自らの周りにある道具を気遣うとき、それは「配視的な配慮的気遣い」と呼ばれます。

この、現存在の道具への気遣いの時間性は、「予期しつつある保有」という特徴をもつと言います。

その道具がどのような目的で使われるものかということを過去の経験から知っており、その使用方法を忘れていない、という意味でしょうか。

ときに、そういった道具は「壊れている」ことがあります。このような「利用しえないもの」の持つ特徴をハイデガーは「欠落」と呼びます。

その他、「不意打ち」をする道具的存在者とか、「抵抗」する道具的存在者といった例をハイデガーは出しますが、要するに、現存在の周りにはさまざまな道具的存在者があり、それぞれに道具としての有意義性はあるながらも、現存在はそれらすべてを道具として用いることができるわけではない、といったような意味でしょうか。

(b) 配視的な配慮的気遣いが世界内部的な事物的存在者の理論的暴露へと変様することの時間的意味

次にハイデガーは、配視的な配慮的気遣いのうちの「理論的態度」、つまり「学的研究」について分析します。

普段道具を使うとき、現存在は道具的存在者を実践的に「操作」しています。

その「操作」を中止して、その道具的存在者に「滞留」を続けるということが「理論的な研究活動」なのだと言います。

ここで注意が必要なのは、ハイデガーはこの実践と理論について、このように書いてあるということです。

「実践にはその種別的な視（「理論」）が固有であるのと同様に、理論的研究もそれ固有の実践なしではない」

「実践と理論の関係」というのは、社会科学における非常に大きなテーマですが、ハイデガーはこれら二つを分けることのできないものとして捉えているということです。

理論的研究において現存在は、道具的存在者を「として」構造で捉えています。

この「として」についてはハイデガーは、「了解および解釈一般と同様に、時間性の脱自的・地平的統一のうちにもとづいている」と言います。

例としてハイデガーは、ハンマーを挙げます。

たとえば、ハンマーを使って仕事をしようと思ったのだが、そのハンマーが上手く使えないほどに重かったとしましょう。

そのとき現存在は、ハンマーが「重さ」という性質をもっているということに気づきません。

さらには、「ハンマーを道具として使うときに、どのくらいの重さが適しているのか」「柄の部分はどのような形であれば使いやすいのか」といったことを考えます。

これらはすべて「理論的な研究」ということになりますね。

ハイデガーは、「学」というもの時間性で捉えた場合、「企投」であると考えられると言います。

例として数学的物理学を挙げていますが、運動や力などを量的に分析する際、「自然というものを数学的に企投している」というのです。

こういった学的な企投のはたらきをハイデガーは、「主題化」と名付けます。

研究をする際、まずは自分の「問題関心」に始まり、それを実際にどのような方法で研究するかということを考え、それを一文でまとめたものを「リサーチ・クエスチョン」と言ったりしますが、この「リサーチ・クエスチョン」をつくるのが主題化ということができるでしょうか。

ハイデガーはこの主題化について、以下のように述べています。

主題化のめざすところは、世界内部的に出会われる存在者を、それがそれ自身を純然たる暴露に「対して投げかけてくる」ことができるような仕方で、言いかえれば、客観となることができるような仕方で、解放することにある

つまり、主題化は客観化することだ、というのですね。

ハイデガーは、「主観」と「客観」という表現をかなり慎重に使います。

それは、デカルト的な二元論に陥らないようにするためです。

ハイデガーはここでも、「客観化」について重要な留保をつけます。

そこで出てくる概念が「超越」です。

ハイデガーは、以下のように述べます。

事物的存在者の主題化 = 自然の学的企投が可能になるためには、現存在は主題化された存在者を超越していなければならない

⇒ 超越は、客観化にあるのではなく、客観化が超越を前提しているのである

ムムム…という感じですね…。

この「超越」については、次の部分で説明されます。

(c) 世界の超越の時間的問題

第1篇第4章の「世界の世界性」のところであつたとおり、ハイデガーのいう世界とは、道具的存在者の「有意義性の統一」でした。

現存在は、世界内存在という特徴をもちます。

つまり、「現存在は実存しつつおのれの世界なのである」。

そしてこの世界が、実存論的に、および時間的に「可能性」をもつということは、時間性が脱自的統一として地平といったようなものをもっていることのうちにひそんでいる、と言います。

また、「脱自態には、脱出の『行き先』が属している」として、それを「地平的図式」と名付けます。

つまりハイデガーは、世界や、そこに存在する現存在を、静的にとらえているのではなく、「時間性」という要素を含めて動的（ダイナミック）に捉えているということです。

この「地平的図式」についてハイデガーが書いていることを列記します。

- 現存在が、本来的にであれ非本来的にであれ、そのうちで到来的におのれに向かって到来する図式 = おのれのためという目的性
- 到来の地平においては、そのつどなんらかの存在しうるものが企投されている
- 現存在が、被投的なものとして、そのうちでおのれ自身に情状性において開示されている図式 = 被投性が直面している場面、ないしは引き渡しが行われている場面 = 存在性（※～するために）
- 存在性の図式においては、「すでに存在している」が開示されている
- おのれという目的のために実存しつつ、被投されたものとしてのおのれ自身に引き渡されて、現存在は、何かのもとでの存在として、同時に現成化しつつあるのである = 現在の地平的図式は手段性によって規定されている

●現在の地平においては、配慮的に気遣われたものが暴露されている

諸脱自態の図式の地平的統一が、手段性の諸関連と目的性との根源的な連関を可能化する

⇒ 時間性の脱自的統一の地平的な機構を根拠として、そのつどおのれの現である存在者には、開示された世界といったようなものが属している

現存在が時熟するかぎりにおいて、なんらかの世界も存在する

⇒ 現存在は、おのれの存在に関して時間性として時熟しつつ、時間性の脱自的・地平的な機構を根拠として、本質上、「なんらかの世界の内で」存在している

⇒ 世界は、事物的に存在しているのでもなければ、道具的に存在しているのでもなく、時間性のうちで時熟するのである

⇒ 世界は、諸脱自態のおのれの外へと脱け出ている脱自とともに「現にそこに存在している」

⇒ いかなる現存在も実存していないなら、いかなる世界も「現にそこに」存在していないのである

道具的存在者のもとでの現事実的な配慮的に気遣いつつある存在、事物的存在者の主題化、およびこの事物的存在者を客観化しつつ暴露すること = すでに世界を前提している

= 言いかえれば、世界内存在という在り方としてのみ可能なのである

⇒ 脱自的時間性の地平的統一にもとづきつつ、世界は超越的である

⇒ 世界がすでに脱自的に開示されているからこそ、世界のほうから世界内部的存在者が出会われうるのである

⇒ 現存在が、そのときそのとき、何を、どのような方向において、どの程度まで、またどのように暴露し開示するかということだけが、たとえ現存在の被投性の諸限界内においてであるにせよ、現存在の自由にできることがらなのである

世界の構造を規定している有意義性の諸関連は、なんらかの無世界的な主観によって或る素材のうえに蔽いかぶせられた諸形式の網目細工ではない

⇒ むしろ現事実的現存在は、脱自的におのれとおのれの世界とを現の統一において了解しつつ、これらの諸地平から、これらの諸地平の内で出会われる存在者のほうへと復帰する

すみません、まとめられないのでただただ列記しました…。

ハイデガーはここで、「超越」と「主観」「客観」についても、下記のように述べて注意を促します。

「超越問題」

・どのようにして主観というものは客観というものへと踏み出てゆくのか、という問いへと変えられることはできない

・問われなければならないのは、存在者が世界内部的に出会われることができ、出会われるものとして客観化されることができるということ、このことを何が存在論的に可能化するのかということなのである

⇒ 世界の脱自的・地平的に基礎づけられた超越へと還帰することによって、その答えは与えられる

「主観」が実存しつつある現存在として実存論的に把握され、そうした現存在の存在が時間性にもとづいているとすれば、世界は「主観的」とは言わなければならない

⇒ しかし、そのときにはこの「主観的」な世界は、時間的・超越的な世界として、あらゆる可能的な「客観」よりも「いっそう客観的」なのである

第70節 現存在にふさわしい空間性の時間性

この章の最後で、ハイデガーは再び「空間性」の分析を行います。

空間性を時間的に考えるとき、

・現存在は空間を取り入れている

・実存しつつ現存在は、そのつどすてに、なんらかの活動空間の場を許容してしまっている

とハイデガーは言います。

現存在がおのれに空間を許容するはたらきについては、第1篇第4章「世界の世界性」の中での空間性に関する分析ですでに述べたとおり、方向の切り開き（布置）と遠ざかりの奪取（距一離）というものによって構成されていると言います。

そして、

・現存在が空間を許容することには、おのれの方向を切り開きつつ、方域（方面）といったようなものを暴露することが属している

というのですが、この方域については、

・方域：環境世界的に道具的に存在していて、所在の場所を定められうる道具が、そこに属するのに適していることの可能な、そうした帰属すべき場所のこと

・おのれの方向を切り開きつつ方域を暴露すること：可能的な彼方と此方とを脱自的に保有しつつ予期することにもとづく

・おのれに空間を許容すること：方域についての方向を切り開かれた予期として、等根源的に、道具的存在者や事物的存在者を近づけること（遠ざかりを奪取すること）

として整理しています。

これらをまとめて、

・現存在は時間性として、おのれの存在において脱自的・地平的であるゆえに、現事実的にまた不断に、その場を許容されたなんらかの空間をたずさえることができる

と述べています。

またハイデガーは、「現実的な状態ないしは状況における此所（ここ）」というものは、「空間上の位置」ではなく、「最も身近に配慮的に気遣われた道具全体の圏域がもっているところの、方向の切り開きおよび遠ざかりの奪取において開かれた活動空間」と表現します。

第71節 現存在の日常性の時間的意味

本章の最後でハイデガーは、本章のタイトルにもなっている「時間性と日常性」についての分析に戻ります。

「日常性」とは、「現存在が差しあたってたいていそのうちにおのれを保持している存在様式」のことです。

以下、ハイデガーによる日常性の時間的分析を列記します。

日常性という表現

・現存在がそのうちで「毎日」おのれを保持しているところの、まさにその実存する様式

・「一生涯の間」現存在をあまねく支配しているところの、いかに実存するかの或る特定の仕方

・「差しあたって」とは、現存在が公共性という相互共存在において「あらわに」存在しているときの在り方

・現存在が「何ということもなくどうやら無事にその日その日を生きている」仕方

・習慣にひたることの愉楽が属している

・日常性は、現存在がおのれのために世人を「主人公」（英雄）として選んでおかなかったときですら、現存在を規定している

・この存在する仕方には公共的な公開性が帰属している

・色あせた無気分という情状性

・日常性で息苦しい「悩みを感じ」、その息苦しさのうちに沈み込むと、さまざまな用事にかまけて気をまぎらわそうとして、新しい気散じを求めるという仕方での息苦しさを回避することがある

・しかしまた実存は、瞬視において、たとえ日常を消滅させることは決してできないにせよ、日常を支配することもある

コロナ禍においては、現存在はこの「日常性」という仕方ではいられなくなっている、と言えるでしょうか。

「ニュー・ノーマル（新たな日常性）」という言葉が一時期よく用いられましたが、果たしてそれは肯定的に捉えられるようなことなのでしょうか。

ハイデガーは本章の最後に、次の第5章、第6章を先取りするような内容の記述をして終わっています。

・現存在は、おのれの時間を過ごしつつ、毎日毎日「時間」を計算に入れ、その「計算」を天文学的・暦法的に規制する

・われわれが、現存在の日常的な「生起」と、この生起において現存在によって配慮的に気遣われた「時間」計算とを、現存在の時間性の学的解釈のなかへと引き入れたときにはじめて、方向定位は十分に包括的なものとなって、その結果、日常性そのものの存在論的意味を問題化することができるにいたる

今回のディスカッションでは、「世界の超越」のところに関連して、なんと「能の舞台」の話になりました。

日本の伝統芸能である「能」の舞台では、柱があつて、屋根があつて、それによって「結界」というものがつくられているとのこと。屋外で能の舞台をやるときにはもちろん柱はないのですが、能を観ていると「柱（結界）」というものが見えてくることあるんだそうです。

ハイデガーの「世界」を考えると、この能における「舞台」のようなものと考えるときわかりやすいかも、という意見が出ました。

哲学学校のレギュラーメンバーには建築家がいるのですが、建築においては「空間などというものはない」というテーゼがあるんだそうです。

また、アインシュタインは「空間というのは、物があつてエネルギーがあるということだ」と述べていると言います。

こういったことが、今回の章でハイデガーが初めて持ち出してきた「活動」という概念と関係しているかもしれない、といったような議論になりました。

ハイデガーと「能」が関連づけられて議論される。

みらいつくり哲学学校ならではの議論だなと思います。

第34回 第2篇第5章「時間性と歴史性」

2021年1月7日（木） 10:30～12:00で、第34回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

今回は、第2篇第5章「時間性と歴史性」を扱いました。

個人の人生を歴史としてとらえるのであれば、その始まりは「生誕」であり、その終わりは「死」ですよね。第5章の冒頭、第72節でハイデガーは突然「誕生」について言及します。これまで「死」の方については、第2篇第1章などで詳細に分析してきましたが、「誕生」についてはここで初めて言及しています。

現存在の「生の連関」というものは、この「生誕と死との間の存在」として捉えることができるのだと言います。

…と言いながら、ハイデガーはやはり「誕生」についてはあまり詳しい分析をしないのですよね。この「誕生」については、ハイデガーの弟子でもあり愛人でもあったハンナ・アーレントが詳しく分析しているようなので、それは来年度の哲学学校のお楽しみということ。

ハイデガーは、この「誕生と死の間」において現存在が持つ「伸び拵げられつつおのれを伸び拵げるといふ種別的な動性」のことを、現存在の生起（せいき）と名付けます。

そして、現存在の生起には、開示と解釈が属していると言います。

現存在の「歴史性」について分析する上で、ハイデガーは注意をします。

それは、

現存在が「歴史の内に立っている」ゆえに現存在は「時間的」に存在するのではなく、現存在はおのれの存在の根拠において時間的に存在するゆえにのみ、この存在者は歴史的に実存するのであり、また実存しうる

ということ。

第73節では、歴史の「通俗的了解内容」について分析します。

私たちは普通、「歴史」というものを「過去となったもの」として、以下の4つの意味でとらえていると言います。

- ①もはや事物的に存在していない、あるいは事物的に存在してはいるが「現在」へとおよぼす影響をもっていない
- ②過去からの由来を意味する
- ③「時間の内で」変転する存在者の全体を、なかでも、人間、人間的諸集団、およぼそれらの「文化」の変転や運命を意味する

④ 伝承されてきたものである

これら四つを「歴史の通俗的理解」としてまとめると、

歴史とは、実存しつつある現存在の時間の中で生ずる種別的な生起のことであって、しかもそのさい、相互共存在のうちで「過去となって」いながら、同時に「伝承されて」いて、さらに影響をおよぼしつつある生起が、強調された意味において歴史とみなされている

となると言います。

このような定義は、それらが種々の事件の「主体」としてに人間に関係しているということによって一つの連関をもっていると言います。

ハイデガーはここで、「博物館に保存されている古代の遺物、たとえば家具」を例にあげます。

この家具は、ただのモノとして展示されているのではなく、その時代にそれを道具として使っていた人間との関係も含めて展示されているわけですね。

第74節では、「歴史性の根本機構」について分析されます。

現存在は、現事実的にそのつどおのれの「歴史」をもつ、あるいはもちうると言います。

現存在は日常性において、「愉楽や軽率や回避」などという、「最も身近に押し寄せてくる諸可能性の限りない多様性」に埋没し、現存在の極限の可能性としての「死」からも逃げてしまっています。

現存在が真の意味で歴史的になるためには、「死に向かって自由である」ことが必要になり、それによって現存在は「実存をその有限性のなかへと突き入れる」と言います。

この有限性をつかみとることで、現存在は「運命」のなかに入っていくのだとハイデガーは言います。

運命は、本来的な決意性のうちにひそんでいる現存在の根源的な生起だとハイデガーは定義します。

そして、「このような生起のうちで現存在は、死に向かって自由でありつつ、相続されたものであるにもかかわらず選びとられた可能性において、おのれをおのれ自身に伝承する」と説明しています。

現存在は、死という自らの有限性を受け止め、その上で自らに与えられた状況の中で「選択するということを選択する」わけですが、そのことにより「おのれ自身に引き渡されていることの無力を引き受け、開示された状況のさまざまな偶然に対して明察をもつにいたる」のだと言います。

この運命的な現存在は、世界内存在という特徴も合わせもちます。世界の中には、他者たちも含まれます。ということで現存在は、他者たちと共なる共存在において実存するわけですが、このような現存在の生起は、共生起であり、全共同運命として規定されると言います。

この全共同運命ということが意味するのは、共同体の、つまり民族の生起であると言えます。

なぜかここで突然「民族」という用語が出てくるんですよね。のちにハイデガーがナチスに入党し、一時的であるとはいえヒトラーに接近するということを含めて考えると、この「民族の生起」はハイデガーがすでに（ゲルマン）民族の特殊性みたいなものを重視していたのか…などと思ってしまうですね。

そしてまた、

伝達と闘争とのうちで全共同運命の力のはじめて自由となる

とも書いてるんです。なんかやっぱり怪しいですね…。

このあとハイデガーは、この運命というものを、時間性に連関させて以下のように言います。

「本質上おのれの存在において到来的であり、したがって、おのれの死に向かって自由でありつつ、死に突きあたって打ち砕けておのれの現事実的な現へと投げ返されうる存在者のみが、言いかえれば、到来的なものとして等根源的に既在しつつ存在している存在者のみが、相続された可能性をおのれ自身に伝承しつつ、おのれの固有な被投性を引き受けて、「おのれの時代」に向かって瞬視的に存在することができる」

「本来的であって、同時に有限的な時間性のみが、運命といったようなものを、すなわち本来的な歴史性を可能にする」

つまり、運命というものは、本来的な時間性を持つのであって、それこそが本来的な歴史性なのだということですね。

そしてここでハイデガーは、「取り返し（反復）」という概念を導入します。訳者の渡辺二郎さんによれば、この「反復」という概念は、デンマークの哲学者キルケゴールの概念から引用したものなんだそうです。

取り返し（反復）

- ・おのれを伝承する決意性の様態
- ・この様態によって現存在は明確に運命として実存する
- ・歴史は、現存在の存在の仕方として、おのれの根を本質上到来のうちにもっている

現存在の本来的歴史性

・先駆的決意性のうちにひそんでいる生起に適合させて歴史性として特色づけられたもの

・到来のうちに根ざしている伝承と取返し

第75節では、「世界・歴史」というものについて分析がなされます。

現存在はその平均的日常性においては、公共的な相互共存在と言うあり方で、「世界」の方から、つまり現存在の周りにあるモノやコトから自らを配慮的に気遣っています。そういったものとともに起こることをハイデガーは、「さまざまな業務、企業、突発事、災害」なのだと言います。

「世界」というものは、「地盤」でもあり「舞台」でもあって、「日常的な実業」にとともに属していると言います。

このような「世界」において現存在は、「個々の現存在の成功、行き詰まり、身上の変化、「総計」を、われわれは、差しあたっては、配慮的に気遣われたものの進捗、現況、変化、有効などから算出」しているのだと言います。

このような「世界」の視点からみた歴史のことをハイデガーは「世界・歴史」と呼び、例として「指輪」を挙げます。指輪というのはモノではありますが、「それを誰が、どんな目的で、どんな状況で、誰に、どんな風に渡したか」という意味が常に付与されているわけですね。

しかしながら現存在は普段、日常的現存在として

・毎日「起こる」種々さまざまのことのなかに、気を散らしている

・おのれ自身へと立ち帰ろうとするには、気散じと、ちょうどいま「起こった」ばかりのことの無連関とから、おのれを取り集めてこなければならぬ

のだと言います。

こういったものの帰結として生まれる「非本来的な歴史性」の特徴は以下のようなものだと言います。

非本来的な歴史性

・宿命の根源的な伸び拵りは秘匿されている

・世人自己として現存在は、頼りない変わりやすさで、おのれの「今日」を現成化する

・最も身近な新奇なものを予期することによって、そうした現存在はいちはやく古いものを忘却してしまっている

・世人は選択を回避する

・諸可能性に対し盲目であるために世人は、既在したものを繰り返すことができず、むしろ世人は、既在した世界・歴史的なもののうちの残存している「現実的なもの」、つ

まり、残り物やそれに関する事物的に存在している報告を、たんに保有して維持するだけなのである

- ・今日を現成化することのなかに自己喪失してしまっているのが、世人は「過去」を「現在」から了解する

それに対してハイデガーの言う「本来的歴史性」や「運命としての決意性」は以下のような特徴をもつと言います。

本来的歴史性

- ・決意性の生起を、つまり諸可能性の遺産を先駆によっておのれに伝承しつつ取り返すこと
- ・気散じの非不断性とは対立する自己の決意性は、それ自身において、伸び拡げられた恒久性なのである
- ・こうした恒久性のうちにおいて現存在は、運命として、生誕と死とこれら両者の「間」とをおのれの実存のなかへと「編み入れて」保持している
- ・しかもそのさい、現存在は、そのような不断性において、おのれのそのときどきの状況の世界・歴史的なものに向かって瞬視的に存在する

運命としての決意性

- ・状況に応じて要求されて、或る特定の決意を放棄するということに向けられた自由
- ・実存の恒久性は中断されるのではなく、まさしく瞬視的に確証される
- ・これらの諸瞬間は、到来的に既在しつつある取り返しというすでに伸び拡げられている時間性から発現する

第76節では、こういった「歴史性」を学問的に探究する「歴史学」を実存論的に分析します。

ここでハイデガーは、ニーチェの『反時代的考察』（1874年）という著作から、歴史学の三つの種類をあげます。

①記念碑的歴史学：現存在は、或る選ばれた可能性を決意しつつ開示することのうちで、到来的なものとして本来的に実存する。決意しつつおのれのほうへと復帰することによって現存在は、取り返しつつ、人間の実存のさまざまな「記念碑的」な可能性に向かって開かれている

②好古的歴史学：現存在は、既在しているものとして、おのれの被投性に委ねられている。

③批判的歴史学：現存在は、到来と既在性との統一において現在として時熟する。現在は、今日を本来的に開示するのだが、しかもそれは瞬視としてなのである。しかし、この今日が、或るつかみとられた実存可能性を到来的に取返しつつ了解することにもとづ

いて解釈されているかぎり、本来の歴史学は、今日の現成化の否定となる。言い換えれば、今日の頽落的な公共性から悩みつつおのれを解き離すこととなる。記念碑的・好古的歴史学は、本来の歴史学としては、必然的に「現在」の批判なのである

そして、歴史学のあり方について、以下のように述べます。

- ・歴史学の実存論的・歴史的根源の具体的叙述は、この学を構成している主題化を分析することにおいて遂行される

- ・歴史学的主題化は、その主要部分を解釈学的状況の形成のうちにもっているのだが、解釈学的状況は、歴史的に実存しつつある現存在が現にそこに既在していた現存在を取り返しつつ開示しようと決意することによって、開かれる

- ・歴史実存の本来の開示性（「真理」）にもとづいて、歴史学的真理の可能性と構造とが開陳されるべきである

第77節では、前節で述べた歴史学のアプローチについての探究を始めたものとして、ハイデガーの一つ上の世代であるヴィルヘルム・ディルタイの歴史学の考え方を挙げます。

ディルタイは、人間を対象とする「心理学」の方法論について、当時主流であった新カント派における「自然科学の知見を人間にも適応する」という考え方に反対します。そこでディルタイは、人間を「歴史的存在」としてとらえるということを行い、「心理学」や「精神科学」を基礎づけようとしたのです。

といっても、ディルタイのその取り組みは、不完全なものであったとハイデガーは批判します。というより、そのような批判を行った、ディルタイの友人でありかつ批判者であったヨルク伯という人による考えに賛同するのです。

ディルタイとヨルク伯の間で交わされた「往復書簡」というものが当時公刊されたのですが、ハイデガーはそれに大きな影響を受け、それに関する長大な論文を執筆しました。

また、それに関する講演も行っており、「カッセル講演」（『ヴィルヘルム・ディルタイの研究活動と歴史学的世界観をもとめる現代の争い』）として日本語にも翻訳されています（後藤嘉也訳、平凡社ライブラリー）。

この第77節は、その7割ほどがヨルク伯の「書簡」からの引用となっており、『存在と時間』の中でも非常に特殊な部分です。『存在と時間』の完成については、時間が無い中、未完成であるにも関わらず公刊しなければならなかったという事情があり、それによるものとも考えられますが、逆に、ハイデガーがどれだけディルタイの取り組み（とヨルク伯によるその批判的協働）に影響を受けたかということの現れでもあるのでしよう。

今回のディスカッションでは、この哲学学校の共同主催者である三田村さんが、「私はここが重要だと思った」という第76節の箇所を挙げてくれました。

・歴史学の主題は、一回限りしか生起しないものでもなければ、そのうえに浮遊している普遍的なものでもなく、現事実的に実存にもとづいて既在した可能性なのである。

・こうした可能性は、超時間的な範例という血の気のうせたものに転倒されるなら、そのものとして繰り返されはしない、言いかえれば、本来的に歴史学的に了解されはしない。

・現事実的な本来的历史性のみが、決意した運命として、現にそこに既在していた歴史を開示することができるのだが、それは、取り返しにおいて、可能的なものの「力」が、現事実的実存のうちへと打ちこんでくるというふうに、言いかえれば、現事実的実存の到来性となってその実存へと到来するというふうに、開示するのである。

「歴史学」というものが探究しているのは、「可能性」なのだということ、そしてその「可能性」は、「現事実的実存に到来として打ちこんでくる」というのですね。

私はこの箇所は読み飛ばしてしまっていたので、三田村さんの指摘によって教えられました。

ハイデガーのいう「歴史学」は、これもハイデガーのいう「解釈学」の一種であると言えますが、私はこれまであまり「歴史学」や「解釈学」に興味を持ってませんでした。

しかしながら、「歴史学」の探究するものが「可能性」であり、それは私たち自身も含む「現事実的実存」に「到来として打ちこんでくる」のだと言うことを学び、「歴史学」に非常に興味をもつようになりました。

ハイデガーがディルタイの歴史学の方法について言及した前述の『カッセル講演』をもう一度読み直したほか、ディルタイの著作として入手しやすい『体験と創作』（上下巻、岩波文庫）を購入してみました。

余談ですが、年末年始は皆さんと同じく「ステイホーム」だったので、Netflixで『ラスト・キングダム』という、9世紀のイングランドを舞台としたイギリスのドラマをずっと観ていました。その延長で、イギリスの歴史に興味をもち、色々と書籍を購入して読んでいたところだったので、今回の「歴史学」に関する学びを受けて、それらへの取り組み方が変わったように思います。

他の参加者によるコメントや指摘が大きな「学び」のきっかけになる。

大学などでの学びでも同じだとは思いますが、多様なバックグラウンドの方々が参加する哲学学校の大きな特徴だとあらためて思いました。

今回の偶数回は、2021年1月21日（木） 10:30～12:00です。

第36回として、第2篇第6章「時間性と、通俗的な時間概念の根源としての時間内部性」を扱います。

第36回 第2篇第6章「時間性と、通俗的な時間概念の根源としての時間内部性」

2021年1月21日（木） 10:30～12:00で、第36回となる「みらいつくり哲学学校オンライン」を開催しました。

奇数回、偶数回合わせて、2020年度の哲学学校の最終回でした。

今回は、第2篇第6章「時間性と、通俗的な時間概念の根源としての時間内部性」を扱いました。

まず第78節でハイデガーは、これまで自らが行ってきた時間性の分析は不完全なものであったと述べます。

なぜならそれは、「すべての生起は『時間の中で』経過するという『事実』を考慮せずに遂行された」からだと言います。

そのため本章では、その「時間内部性」というものと、それが生み出す「通俗的な時間概念」というものについて分析すると述べます。

第79節では、現存在が時間についてどのような配慮的な気遣いをしているかということから分析を始めます。

現存在は、以下のような配慮的な気遣いをしています。

「そのときには」 ⇒ 予期 （「いまはまだない」がひそんでいる）

「あのときには」 ⇒ 保有 （「いまはもはやない」がひそんでいる）

「いまは」 ⇒ 現成化

通俗的な時間概念においては、現成化が特有の重みをもっているとハイデガーは言います。

日常的な現存在は、いつも「いまは・いまは」と言い、現在をもとに配慮的な気遣いをしているのです。

ここでハイデガーは、「日付け可能性」というあらたな用語を定義します。

ひとは、太陽の動きにしたがって、つまり日の出や日の入り、そしてそれによっておこる昼や夜という区別にしたがって時間をとらえています。

「時間は、ひとが『昼間のあいだ』営んでいるものにもとづいて、日付けを打たれる」と言うのです。

そしてハイデガーは、こんな風にも書いています。

「『漫然と生きながらえる生活』においては、現存在は、おのれが純然たる『いまは』の絶え間なく持続する連続に沿って走っているのだとは、けっして了解していない」

平均的日常性における現存在は、この「いまは」という「現在」が絶え間なく持続するといったあり方をする「時間」の「内部」にいるのだということには気づいていないということですね。

また、このような「非決意」の状態にある現存在は、以下のように自らを了解していると言います。

「現成化することのうちで出会われるところの、またさまざまに変わりつつ押しよせてくる、最も身近のあれこれの出来事や偶発時にもとづいて、おのれを了解する」

「多忙をきわめて配慮的に気遣われたものにおのれを喪失しつつ、非決意の人は、そうしたものにおのれの時間を失っている」

「だからこそ彼にとって性格的な語り方は、『私には時間（ひま）がない』である」

色々なことで多忙にしているとき、ついつい口癖のように「時間がない」と言っていたことを思い出すと、ぐさっと刺さりますね。

一方で、「決意」した「本来的実存」にとっての時間については、以下のように書いています。

「本来的実存が、決意性においてけっして時間を失わず、『つねに時間（よゆう）をもっている』」

「決意性の時間性はその現在に関しては瞬視という性格をもっている」

「瞬視が状況を本来的に現成化するとき、この現成化のはたらきは、それ自身が指導するのではなく、既在しつつある到来のうちに保持されているのである」

「瞬視的実存は、自己の本来的な歴史的不断性という意味での運命的に全体的な伸び拡がりとして時熟する」

第80節では、「公共的な時間」というものについての分析から始めます。

ハイデガーの言う「公共的な時間」とは、「世界内部的な道具的存在者や事物的存在者がその『内で』出会われるところの、まさにその時間」だと言います。

「公共的な時間」の特徴は、「有意義性の構造をあらわにする」ということです。

第1篇第4章でやったように、「有意義性の連関」は「世界の世界性」でしたから、「公共的な時間」は「世界性」に関連しているということですね。

この「公共的な時間」を測定するものが「時計」です。

ひとはこの時計を見ながら、「時間を読み取る」と言います。

「時間を読み取る」ということが実際に意味するのは、「いまはこれこれの時間だ、いまは何かをすべき時間だ、何かをするには時間がまだある」と考えることであり、「時計を見つつ時間に順応すること」は、本質上、「今を言うこと」とであると言います。

ここでもやはり、「現在」が重視されているのですね。

第81節では、これまで分析してきた「時間内部性」と「通俗的な時間概念」というものがどこから生まれてきたのかということ进行分析します。

ここでハイデガーは、「今・時間」という用語を出し、

・「今ここに」どの今においても」「ただちにもはや今ではない」「わずかにまだ今ではない」というかたちでおのれを示す、そのような仕方では時計使用において「看取された」世界時間

であると定義します。

この「今・時間」は、「日付け可能性と有意義性というこれら両構造を『現出』させず、隠蔽する」と言います。

つまり、「世界時間を水平化し隠蔽する」というのです。

「今・時間」には、「中断もなければ隙間もない」、そして、「時間は無限であるというのが主要なテーゼである」と言います。

「今・時間」の内部にいるということは、つきつめると現存在が自身から「逃避している」ことになるとハイデガーは言います。

そしてそのことは、「死」からの逃避、言い換えれば「世界内存在の終わりから眼をそらす」ということも意味していると言います。

このような状態にある「世人」は、「けっして死亡することがない」と言います。

世人は、「終わりまでにはまだ依然として時間がある」というのですが、そこで表明されているのは「失ってもよいという意味での時間をもっていること」だとハイデガーは言います。

これまでの分析でわかったように、通俗的な時間了解においては、時間という根本現象を今のうちに見てとっており、しかも「切断されてしまった純然たる今」のうちに見てとるということで、これをひとは「現在」と名付けています。

これに対して、第4章で分析したような「脱自的・地平的な時間性」においては、第一次的に到来から時熟するというように時間を了解していました。

第82節は、このような通俗的な時間概念と「精神」との関係性について分析したヘーゲルの時間概念について検討するのですが、ちょっとここは長くなるので割愛します。

ちなみに土畠は、北海道大学公共政策大学院に在籍していた2009～2013年、ヘーゲルにはまっていた時期がありました。

一度、神奈川で開催された「ヘーゲル学会」というものにも参加したことがあります。

ヘーゲルの哲学、ハイデガーの哲学と比べても本当に難しい…。

今回改めてヘーゲルの『精神現象学』の関連箇所を読んできましたが、やっぱりハイデガー以上に何言ってるのかわからないですね（笑）

でも、ヘーゲル哲学は、その後のマルクスの思想とか、ハーバーマスなどに代表されるフランクフルト学派などにも大きな影響を与えているので、哲学史においては非常に重要です。

でもちょっと今回は割愛…。

『存在と時間』既刊部の最終節となる第83節「現存在の実存論的・時間的分析論と、存在一般の意味への基礎的存在論的な問い」では、これまでの分析をまとめた上で、まだ解決されていない問いをあげて終了しています。

既刊部では、現存在の存在全体性の根源的構造というものを分析し、その地平として「時間性」というものを見出して分析しました。

しかしながら『存在と時間』のそもそもの目標は、現存在のみならず、すべての存在者に関する「存在問題一般の仕上げ」というものでした。

アリストテレスなどの古代の存在論から、デカルト、カントに至るまで、これまでの存在論では「事物概念」をもとに考察してきたとハイデガーは批判します。

それに対してハイデガーは、「存在一般の理念」というものについて探究するわけですが、そのためには「問いと答えの確たる地平」というものが必要でした。

『存在と時間』においてハイデガーはその地平としての「時間性」というものを見出しましたが、「われわれの根本的探究は、途上にある」と言います。

ハイデガーはその探究の目指すところについて、

「脱自的な時間性自身の或る根源的な時熟の仕方が、存在一般の脱自的企投を可能化するにちがいない」

と述べ、以下のような問いを挙げて終わります。

Q. 時間性がこのように時熟するときの様態はどのように学的に解釈されるべきであろうか？

Q. 根源的時間から存在の意味へと一つの方途が通じているだろうか？

Q. 時間自身が存在の地平としてあらわになるのであろうか？

この問いへの分析については、ハイデガーが『存在と時間』を公刊した直後、1927年の夏学期にマールブルク大学で行った講義である『現象学の根本問題』において、不十分ではあるもののなされています。

日本のハイデガー研究者として著名な木田元先生らにより、作品社から2010年に日本語訳が出版されていますので、関心のある方はぜひそちらも手に取ってみてください。こちら約600ページと大著ですが、講義録なので、『存在と時間』よりずっと読みやすいです。

参考までに、『現象学の根本問題』の章立てを載せておきますね。

第1部 存在に関するいくつかの伝統的テーゼについての現象学的批判的な論究

第1章 カントのテーゼ 「存在はレアールな述語ではない」

第2章 アリストテレスにまで遡る中世存在論のテーゼ 「存在者の存在構造には<何であるかということ>、つまり本質存在と、可能な事物的眼前存在、つまり事実存在が属する」

第3章 近代存在論のテーゼ 「存在の根本様態は、自然の存在つまり広ガリノアルモノと、精神の存在つまり思考スルモノである」

第4章 論理学のテーゼ 「すべての存在者はそのつどの存在様態には関わりなく『である』によって語られうる」。繫辞としての存在

第2部 存在一般の意味についての基礎存在論的な問い。存在の根本諸構造と根本諸様態

第1章 存在論的差異の問題

『存在と時間』既刊部の最後で出された問いに対する分析は、第2部の方ですね。

とはいえ、なぜ第1章しかない…。

第1部の方は、『存在と時間』の最初の方で宣言された「これまでの存在論の破壊」に相当するものです。

このようにハイデガーは、「存在一般の問い」については、著書や講義で自らの計画に従って作業を始めるものの、いずれも「途上」で終わっています。ただ、後期になってもハイデガーは、この「存在一般の問い」について思索を続けています。

ハイデガーの人生における「思索」が、いつも「途上」にあったと言えるでしょうね。

今回のディスカッションは、「節分」についてのコメント、『鬼滅の刃』についてのコメントから始まりました。このあたりはさすがみらいつくり哲学学校（笑）

ディスカッションの中心となったのは、自らの「いのち」とその「有限性」に関する話題です。

・自らの「いのち」の「有限性」を受け入れるということが「決意性」につながるのではないか。

・たしかに自分は「決意性」をもって施設を出たけど、でも自分は健常者の方々と同じような「世人」になりたかった

・重症心身障害児・者は、自らの「いのち」や「死」をどう了解しているのだろうか？

・重症心身障害児の息子は、友人の死を知った後、翌日に突然学校で大泣きした。おそらく、彼なりに友人の「死」を了解したんだと思う

・そのような「ズレ」は誰にでもある。それは、「既在の取り戻し（反復）」なのではないか？

ハイデガーの思索と同様に、みらいつくり哲学学校の今年度最終回も、やはり新たな「問い」を生むことで終わりました。

これで、『存在と時間』の既刊部、全83節が終了です！！

2020年5月から、隔週で開催してきた「偶数回」。

もう少し日常の生活に近い形で「哲学」を考える奇数回と比較して、本格的な哲学書を読む偶数回については、徐々に参加者が少なくなるだろう、もしかしたら自分一人になるかもしれない、一人でもZoomでレジュメを報告してそれについて自分で語って録画をみんなに共有しよう、そんな風に思っていました。

実際には、偶数回についても私を含む6名の「レギュラーメンバー」が、最後までついてきてくれました。

私以外の5名についてはおそらく、人生で初めて「哲学書を最初から最後まで一冊全部読む」という経験だったのではと思います。

もともと哲学を学んでいた私にとっても、やはりハイデガーはかなり理解が難しく、参加者からの指摘やディスカッションの中での気づきが本当に多くありました。

その他、ときどき参加してくださった方、ラジオ参加してくださった方、録画で観てくださった方、合計すると30名近い方々が、それぞれの形で「ともに哲学する」ということに参加してくださったことになります。

新型コロナウイルスのパンデミックの影響を目の当たりにし、「いまこそどのような人にも哲学が必要だ」と思って始めた「みらいつくり哲学学校」。

ひとまず最初の一年をやり遂げることができて、感慨深いです。

みらいつくり哲学学校は、来年度も開催予定です。

今年度同様、奇数回と偶数回にわけて開催しようと思っています。

今年度とは違って、少しゆっくり、毎週ではなく隔週で開催を…と前回までの報告で書きましたが、それじゃあ一年で全30回が終わらないことに…。そんなことに今さら気づく…。ということで、隔週とはいかないまでも、時々休みを挟みながら今年度よりはちよっとゆったりと進めていけたらと思っています。

奇数回の「哲学入門」については、今年度の偶数回で扱ったハイデガーの『存在と時間』の訳者（中公クラシックス版）である渡邊二郎さんの『人生の哲学』（角川ソフィア文庫, 2020年）を課題図書にしようと思っています。「人生の根本問題に向けて」というテーマで、全15回、「生と死を考える」「愛の深さ」「自己と他者」「幸福論の射程」「生きがいへの問い」という5つのカテゴリーで、ハイデガーをはじめとした様々な哲学に言及しながら書かれています。

偶数回の「哲学書」については、ハンナ・アーレントの『人間の条件』（志水速雄訳, ちくま学芸文庫, 1994年）にしようと思っています。

（ドイツ語からの訳書は『活動的生』森一郎訳, みすず書房, 2015年）

今年度のハイデガーの「弟子」でもあり「愛人」でもあった、こちらも20世紀を代表する哲学者／政治学者／社会学者であるアーレントの代表作ですね。

『存在と時間』よりは非常に読みやすい本だと思います。

こちらは、全部で45節あるので、15回で分けて毎回3節ずつ読み進めていこうと思っています。

2021年度のスタートは、4月6日（火） 10:30～12:00の予定です！

通常参加のほか、カメラ&マイクオフでZoomに参加する「ラジオ参加」、Youtubeのライブ配信（限定公開）で参加する「ライブ配信参加」、記録動画を視聴する「録画参加」など、どのような形でも参加できます！

このような時代だからこそ、いっしょに「哲学」してみませんか？

ご連絡、お待ちしております！！